

第9回

ふるさと

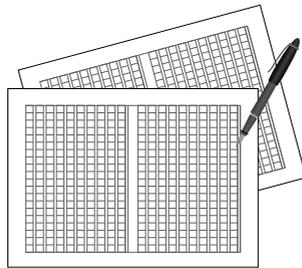
秋田

文学賞

受賞作品集



第9回ふるさと秋田文学賞 受賞作品集





## 刊行にあたって

本県は、全国の都道府県に先駆けて、平成二十二年に「秋田県民の読書活動の推進に関する条例」を制定し、平成二十六年には十一月一日を「県民読書の日」と定めました。

「ふるさと秋田文学賞」は、その記念事業として創設され、県内外の方々に秋田への愛着を深めていただくとともに、広く読書に親しむ気運を高めることをねらいとして、秋田の自然や文化、風土、人物などを題材として描いた作品を対象に、選考されている賞であります。

第九回を迎えた今年度は、全国から過去最多の一四二編のご応募をいただき、応募された皆様には心より感謝申し上げますとともに、この賞に対する関心の高まりを大変うれしく思っております。

今年度は、いまだ収束が見通せないコロナ禍においても徐々に日常生活を取り戻しつつある中、コロナ禍を描いた作品が少なくなった一方で、秋田の観光地やお祭りを題材にしたもののほか、ふるさと秋田への強い想いを寄せた作品が数多く見られました。

読書は乾いた心をしつとりと潤し、無限の世界へと導いてくれる翼のようなものです。

今後も、県民の皆様が、日々の暮らしの中で本を手にする機会が増え、じつくりと活字に触れることにより、一歩前に踏み出す勇氣と未来への明るい希望を抱きながら、心豊かな人生を送ることができま  
すよう、読書活動の推進に全力で取り組んでまいりますので、よろしくお願いたします。

令和五年二月一日

秋田県企画振興部長 鶴田嘉裕

# 目次

## 第9回ふるさと秋田文学賞 小説の部

◇ふるさと秋田文学賞

クリームシチュー

受賞者のことば

青山トীগオ・・・7

◇ふるさと秋田文学賞佳作

浮遊する水

受賞者のことば

山本郁人・・・53

◇ふるさと秋田文学賞佳作

千東立つ日陰の月花

受賞者のことば

山本愛海・・・95

第9回ふるさと秋田文学賞 エッセイ・紀行文の部

◇ふるさと秋田文学賞

該当作なし

◇ふるさと秋田文学賞佳作

方程式のない斑紋

受賞者のことば

石山敦子・・・131



第9回ふるさと秋田文学賞 小説の部

ふるさと秋田文学賞

クリームシチュー

青山  
トーゴ・作

ク  
リ  
ー  
ム  
シ  
チ  
ユ  
ー

稲刈りが終わったばかりの田んぼ道を歩いているところだった。地面をにらんで唇をとがらせていたのは、村が町に変わって二つの小学校が合併したせいで、大きな丘を越えて通学に片道三十分もかかるのがつらいからじゃなかった。

わーと声が出た。誰かが背中につつかってランドセルがずり落ちそうになったから、肩ひもを握り直さなくてはならなかった。朝はおとなしく集団登校するのに、帰りは早足で駆けていく。たかが野球をしたいというだけで……やきゅう？　ぼくの頭の中を占めていたのはそんな子どもくさいことでもなかった。

あれからやっとな年がたったのだ。

母ちゃんがぼくに置き手紙をしていなくなったのは去年の秋だ。

だけど……。

あのとき、ばあちゃんは言った。

(愛子さんは、実家に病人が出たがらしばらくあつち、手伝いにいぐごどになったがら)

それから少したった夜、こんどは父ちゃんとはあちゃんのひそみ声がふすまごしに聞こえてきた。

(……おどご、いんだ。秋田の市内でホステスやんだと……)

(しつたらごど、バガよめ……)

ふすまを開けて「ホステスってなんだ」と訊いたらばあちゃんは「おどなのごどだ、知らねくていい」と怖い顔をした。父ちゃんも。

四人家族が三人になってしまっただけじゃなかった。家の中から笑い声まで消えてしまった。

影を踏んで歩いていると赤トンボがひっきりなしに顔をかすめていく。道を外れて田んぼの畔にしゃがみ、ランドセルをおろす。

大きく息を吸ってみたけれど、乾いた土のおいしくない。

去年の秋はこうじゃなかった。

フナ釣りにあきてトンボとりをしていると、母ちゃんが稲の束をハーベスターにかけていた。籾をかき取ったハーベスターはワラになってしまった稲束を刻んで吹き飛ばすから、母ちゃんの肩にはワラのかすが積もっていた。でも母ちゃんがそばを通ると、ワラのおいに混じっていい匂いがした。イチゴを食べるときにかける練乳みたいなの……。

お昼になって母ちゃんが田んぼで風呂敷を広げたとき、その匂いがもっと強くなった。唇に笑みを浮かべて、はい、と握りめしを差しだしてきた母ちゃんの額には汗が浮かんでいて、よ

く見るとまつ毛にもワラのかすがのついていた……。

同級生たちの姿はとうに見えなくなっていて、そっちのほうからみーんと音を立てて車が近づいてきて、すぐ前を走りぬけていった。

軽トラックの運転席から腕だけがおりている。なにか捨てた。

鼻で息を吸ってみる。

ガソリンが燃えた臭いとタバコの臭い……。

あのときの臭いだ。今年の夏に父ちゃんが野球の試合を見せてやると言って、車を走らせて秋田市内の球場に連れていってくれた。あのときの駐車場の臭いだ。

お盆の前ころだったから、ふた月も前だ。ぼくはあのとき、試合なんかより八橋やばせという地名にどきどきした。

(この近くに母ちゃんが住んでいるんだ……)

あれだけいたトンボがどこかにいつてしまった。

ただいま、と小さく言って、ちゃぶ台の横を抜け、ふすまを開けて自分の部屋に入った。窓の外には田んぼ。そのすぐ先にブローラーの加工場がある。この時間はまだ、おうど色の建物の窓ガラス越しに、白い服を着たおばさんたちが包丁を手にして鶏をさばいている。

そつちを見ないようにして、壁と本棚の隙間に手を突っ込む。隠してあった鍵をつかむと、机の引き出しの穴に差し、ピンク色の紙を手を取った。新聞のチラシを七夕の短冊みたいに切ったやつだ。

その紙を裏返すと、なんども見た文字がある。

母ちゃんのあたらしい住所です

秋田市八橋○番地○号　みのりアパート202号室

来年の秋、稲刈りが終わったころむかえにいくよ。

これは約束。だれにもないしょだよ

稲刈りが終わったころ、とつぶやいてみる。

今年の稲刈りは九月を半分すぎで始まった。刈ったあとは稲におに吊るして干して、ハーベスターで脱穀して、それを袋につめて小屋に運んできて、籾すりをやってようやく玄米になる。でも一度に全部刈ってしまうわけにはいかない。ほかの作業の進み具合をにらみながらやらないといけないから、親せきのおじさんの手を借りて父ちゃんが最後の玄米を農協に納めた

のが十月十四日だ。

それからもう一週間も過ぎているのだ。

十月に入る前から、母ちゃんがいっつ迎えにきてくれてもいいように、好きな漫画をランドセルに入れていたし、靴も部屋に隠して、窓ガラスの鍵だつて開けたままにしていた。母ちゃんの夢をみて目が覚めて、そのたびに部屋の電気をつけると悲しい気持ちになった。がまんどきず、父ちゃんもばあちゃんも家にいないのを確かめてから、母ちゃんの洋服がまだ残したままになっているダンスを開けて、ふわふわしたセーターの匂いをかいだこともある。

ピンク色の紙を引き出しに戻して、机の前に腰かけた。

ばあちゃんが買ってきた問題集が机に三冊。算数と国語と理科。

これをやらないとばあちゃんは機嫌が悪い。ばあちゃんほんとうは父ちゃんを給料取りにしたかったのだ。日本は工業化する、田んぼなんかカネにならない、だから勉強しろと言う。口癖は「武埴三山みたいになれ」だ。この井内いないで生まれた有名な人で新聞社の社長とか秋田の市長をしたらしいけど、それしか知らない。ばあちゃんは、スポーツなんかできなくていい、とも言う。問題集をちゃんとやったら、ほうびに好きなものを買ってやれ、と父ちゃんにまで命令する。

でもぼくがほしいのはお金なんかじゃ買えない。

机には山もりになったポテトチップが、枯れたワラみたいなおいをさせている。ばあちゃんが揚げたからイモが厚いし色も濃い。薄くて、ぱりつと揚げた母ちゃんのやつが食いたい。指先をなめなめ、問題集をめくっていく。

右の図を見て、次の文の（ ）に当てはまる言葉を答えなさい。

乾電池の、違う極がつながっているつなぎかたを（ ）つなぎ、という。回路に流れる電流の大きさが、乾電池一個のときより（ ）くなり、モーターが速く回る

答えはわかる。でも、いつしかうとうととしてしまった。

「健太あ、できたよ」

窓の外を見るとプロイラー工場の灯が消えている。

三人で晩めしを食っていると、ぼくが半分も食い終わらないうちに、父ちゃんが「どやぐ（親友）の家さ行ってくる」と言っただけでかかっていった。また酒を飲みに行きたい。

「なあ、父ちゃんって、いづがら行くの？ 出稼ぎ」

台所で洗い物をはじめたばあちゃんの背中<sup>に</sup>訊いてみる。

「あつちで働ぐのは十二月がらだ」

「やっぱり土方<sup>どかた</sup>？」

「んだ、今年は千葉だつて」

ごちそうさまを言つて、自分の部屋に布団をしいてから、『八十日間世界一周』を持つて茶の間に戻つた。ばあちゃんが用事で秋田市に行つたとき、「おめももう四年生なんだがら」と言つて、漫画雑誌といっしょに買つてきてくれた。

村から町に変わつても、ここには本屋がない。

ぼくは父ちゃんの折り畳みの座いすに座つた。背中にスポンジが入つていて楽ちんだ。体格がいい父ちゃんは、昼めしを済ませるといつも、泥やワラのかすがついた作業着のチャックを首まで上げて腕組みをして、とても窮屈そうに、だけどとても穏やかな顔をしてこの座いすで昼寝をしていた。股の間にある染みと焼けこげは酒とタバコだ。母ちゃんがいなくなつてから、父ちゃんは酔つ払うとこの座いすで朝まで寝てしまう。汗くさいからぼくは口で息をする。

本は教科書の三倍ぐらい厚い。古い冒険小説で漢字にふり仮名がたくさんある。イギリスの

ロンドンに住むフィリアス・フォッグ卿というおじさんが、友達と賭けをして召使いと世界を旅する。じつは銀行強盗じゃないかと疑われていて刑事が後をつけているのだけど、出発からたった一週間で一行はもうエジプトのスエズ運河にいる。でも、ぼくはそこまで読むのに一月近くかかった。

開いたばかりの本を膝の上に置いた。

どんなことだべ。エジプトって……。

おどなになっただら行くこと、あるんだべか。そのためには給料取りにならなくちゃ……勉強しねば……算数と理科は好きだけど……。めずらしくそんなことを考えているとまぶたが重くなってきた。

「こら健太あ、おぎろ。かぜひくど」

父ちゃんが帰ってきた。急いで部屋に戻る。ふすまを少し開けて茶の間に目をやる。

父ちゃんがひとりで飲みだした。目のまわりまで赤い。こういうときはここから出ていっちゃならない。

（おめもおつきぐなったらコメ作るんだ。おら家には四町歩も田んぼがある。地主みたいなもんだ……）

いつもの自慢だ。四町歩。算数で面積を習った。一辺が百メートルの正方形が一ヘクタールだ。一ヘクタールは百アールで、一町歩が九十九アール。一ヘクタールがだいたい一町歩だから、うちには一辺が二百メートルの正方形をした田んぼが一枚あることになる。

ななが地主だ。フォックグ卿みたいに大金があるはずがないのはわかるけど、それだけの田んぼがあつてもうちは貧乏だ。武志たけしの家には冷房機がある。あいつの父ちゃんは町の役場につとめているからだ。

「おおい、健太あ、おぎでるんだべ」

ぼくはふすまを開けた。

「なした？」

「あっち、出稼ぎがら帰ってきたら好きなものを、買ってやつから」

父ちゃんは何度も言っていることをまたくり返した。酔っ払いは嫌いだ。出稼ぎに行くまで一カ月もあるのに、農協にコメを納めてしまうとほかにやることがないのか酒ばかり飲んでる。

「言ってみろ、なにほしい」

「そんたらの、ねよ！」

乱暴にふすまを閉めた。布団にもぐり込んだけれど、すぐに眠れないのはわかっている。

母ちゃんは今日も迎えに来てくれなかった……。

夜中に起こされてもかまわないし、学校に来てくれたっていいのに。

母ちゃんいまなにしてるんだろ。ホステスって、男の人に酒をつぐ仕事らしい。でも誰に？

……。

川向かいの家のやせ犬が細く長く吠えている。

酒飲ませるんだから夜は遅いんだべが……。

母ちゃん、夜中もずっと働いてるんだべが……。

いま何時だろ。

居間の真っ黒な壁時計は父ちゃんが新しい電池を入れられないから、去年の秋から止まったままだ。

やっぱり今夜も眠れそうにない。

机のスタンドライトを引っ張ってきて布団のなかで本を開いた。フォッグ卿たちはインドの西の端から東の端まで横断する鉄道に乗り込んだ。

母ちゃんが迎えにきてくれないうまま十一月に入ってしまった。

朝めしを済ませると、寝る前にランドセルにしまっていた漫画を引っ張り出して教科書を入れ直した。

集団登校の列から遅れて歩いていると、コイの鱗みたいな雲が遠くでなびいている。夏に裏山に湧いていたやつは木に登ったら手でつかめるぐらい近かったのに。

給食をすませると体育の授業が始まった。今月からドッジボール。嫌いだ。鶏肉と同じぐらい。

秋になったら、母ちゃんがいる八橋の小学校に転校するのだと思っていた。そうすれば、きつとこんな悪魔の発明みたいなスポーツをやらなくてすんだはずなのに……。

いつもピッチャーをやる武志から「おめの投げ方はおなごみたいだ」と言われて野球がいやになった。でもドッジボールという言葉を聞くのはもつといやだ。ボールをぶつけられるとコートの外に出るしなくなるし、コートの外にいてもぼくにボールはこない。

やっと地獄みたいな時間が終わって、体育館の水飲み場で手を洗っているといい匂いが香った。

ふり向くと、担任の節子先生がタオルを手にして立っていた。

くると内側をむいた髪。黒いところが大きい目。この春やってきた節子先生を見たとき「てんとう虫のサンバのお姉さんだ」と思った。母ちゃんとは年も違うけど、もしかしたら母ちゃんも少し前までは節子先生みたいだったのかもしれない。

「はい、ごくろうさま。使いかけだけど」

ふわつとした白いタオル。

手を拭くついでにそつと匂いを吸い込んだ。

一度息を吐いて、また吸い込んだ。

「ヘンタイ！」

振り返ると智慧が汚いものでも見るような目でにらんでいる。

いつものことだ。このクラスメートは去年、母親と二人で北海道からやってきた。母親は空き家を改装して美容室をしている。こんな田舎なのに客が絶えないのは腕がいいからじゃなくて、聞き上手だからなのだとばあちゃんは言っている。

家に戻り、三和土で「ばあちゃん」と呼んだけれど返事がない。

ちゃぶ台を見るとチラシのうらに〈集会所に行ってください〉という書き置きと、いつものポ

テトチップがのっている。

居間の電気ストーブのスイッチを入れて、それを食べ始めた。

塩味が強すぎるからなんども指の先をなめた。

半分ぐらい食べるともう飽きて、ストーブに顔を近づけて身体を横にした。まだ塩辛い歯の裏を舌の先でせせつっていると、夏に海の水を飲んで鼻の奥が痛くなったのを思い出した。

まぶたを閉じると、砂浜に寝ころんで太陽の光を浴びているような気までしてきた。井内地区の海水浴。あの日、陽射しがまぶしすぎて頭がくらくらした。強い光がまぶたの裏に残っていて、目の前の景色が見えたり見えなくなったりした。

あの一日がずいぶん遠く感じる。心地よい眠気に包まれてまどろんでいると、海水よりも塩辛い別の記憶が波のように押し寄せてきた。

貸し切りバスで出戸浜に連れていってもらった。浜はイカやトウモロコシを焼くにおいがしていた。波は穏やかで水も澄んでいて、節子先生も一緒だった。

赤いサンバイザーと、赤と黒と白の縦じまの水着――。

先生は声を上げながら波打ちぎわを行ったり来たりしている。脚を洗う波が碎ける音や先生の息づかいまで聞こえてきそうだったけれど、それを浜辺で見ていたばかりのまわりからどうし

てなのか音が消えてしまった。

母ちゃんも少し前まではああたったんだと思った。

まわりをさっと見回して海の家まで戻り、ビーチサンダルを脱いでみんなの荷物が置かれたほうに膝立ちで近づいた。

先生の赤いバッグの上に白い帽子がのっていた。つばが大きくてリボンがついている。手に取ってみる。左右に目を走らせてから帽子の内側に顔を近づけた。鼻からそっと息を吸ってみた。

いい匂いがする。母ちゃんとは違うけど、なんていうのか椿の花みたいなの……もっと息を吸い込んだとき、

「なにしてんだ、おめ」

背中から声がして帽子を放りだした。

赤い水着姿の智恵が立っていた。

「なんかへんなことしてたでしょ、いま！」

目の前の色が薄れていって顔がほてってきた。

「なんも、なんもしてね。ぜったいしてね」

ぼくを見おろしている智恵の目がゆつくりと細くなつていく。

「だから、なにもやってねって」

耳まで火がついてしまったみたいだった。

智恵に背をむけ、膝に両手をそえて立ちあがった。

——とんでもないことをしてしまった。

智恵の後ろで、節子先生が怒ったような困ったような顔で立っている姿まで浮かんできたそのとき、

「なんもさ。見なかったことにしてあげる」

はっとして振り返った。

「別に泥棒するつもりじゃなかったんしょ」

智恵の目が弓みたいたわんだ。

「ああ、わたしもほしいな、先生みたいなおしゃれな水着」

身体じゅうから力が抜けていった。智恵のまわりにあつた色や形が急に戻ってきて目をぱちぱちさせた。膝まで水につかっていた節子先生がイルカみたいに頭から海に飛びこんだ。

あの夏、すごく楽しみにしていたサザエのつば焼きだったけれど味をよく覚えていない

……。

そして。あと三日で学校が始まるという日の午後。智恵はああ言っていたけれど、やつぱり心配になってきた。

智恵の母親がやっている美容室の前まできて、なんと言おうか迷っていると、じょうろを手にして表に出てきた母親と目が合った。

「ちええ、あなたにお客さんだ」

店の奥から半そでの青い服を着た智恵が現れた。

「なしたの？ 宿題？ ひとけたの割り算なら教えてあげるけど」

「いや、いい。それよっか、外で」

先になって橋を渡り、左にある神社の賽銭箱の前に並んで座った。

すぐ横に白いのぼりが気だるそうに垂れ下がっている。

智恵の手にはキャラメル箱がある。足元は白いサンダルで、小さな爪は海で拾った貝殻みたいな色をしている。

「なんか用、あったんじゃないの」

うん、と答えたけれど智恵の顔をまともに見られなかった。

「食べる？」

首を横に振った。

「いいから、ほら食べなよ」

差し出された一個を口に入れた。けれど、一度だけ噛んで、片方のほっぺに押しこんでから言った。

「の……こないだの……あれ、海で……だれにも」

口にキャラメルがあつて良かったと思つた。

智慧も包装紙をはがした。でも口に入れないでそれにじつと目をやっている。顔を上げると言った。

「ぜったい言わないよ」

「ほんと、だな？」

「あー、はんかくさい」

ぼくはようやくやく甘くなつてきたキャラメルを舌の上で転がした。

きょうの智慧が、いつもは結んでいる長い髪を肩におろしているのにようやく気がついた。いい風が吹いて、ケヤキの枝がかさかさとして鳴った。

「そんなことよりさ、戻ってこないの？ まだ」

油断してたら突然ドッジボールの球が飛んできたみたいだった。

「川反かわばたにいるんだよね。秋田の飲み屋街だってお母さんが言ってた」

ぼくはとっさにのぼりを見上げた。「……仕事だから」

「仕事ってさ……」言いかけた智恵が空を見上げた。

長い髪が肩のあたりで踊った。

「ねえあんた、大人になつたらなんの仕事やるつもり？」

考えたこともなかったから、おめは？ と訊いてみた。

「お医者さん。資格があればどこでも生きていけるってお母さんが。したっけ……お父さんみたいな人、助けてあげられる」

智恵の父親は炭鉱の事故で亡くなったのだった。

音のない居間でばあちゃんたちとめしを食う日を重ねるうちに庭のカエデが赤くなり、その葉っぱも散って十二月に入ってしまった。寝る前にランドセルに詰める漫画を、ばあちゃんに買ってもらったばかりの来年一月号に替えた。赤と金色が使われた表紙に描かれた門松の絵を

ぼくはじっと見つめていた。

近所の人が運転する車にばあちゃんと一緒に乗せてもらって、羽後飯塚駅まで父ちゃんを見送りに出かけた。秋田駅で上野行きの夜行寝台に乗り換えるらしい。秋田駅の近くには八橋の街がある。

夏に野球を見に行ったときは車で一時間もかかった。家の壁にある時刻表を見たら秋田駅は羽後飯塚駅から五つも先だ。

ホームの端から列車が遠ざかっていく。線路の両脇は田んぼで、緑の膜をかけたように染まっているのは、稲の切り株から伸びたひこばえだ。ひこばえは稲みたくに見えるけれど、稲にはなれないで枯れてしまう。だからコメもできないんだよと教えてくれたのは母ちゃんだ。

ひこばえの先っぽが、誰かを手招きでもするみたいに揺れている。

ぼくは母ちゃんが編んでくれたマフラーを巻き直した。

鉛色の空が何日も続き、冷たい雨がみぞれに変わって田んぼの先の山が白くなった。フォックグ卿はインドで助けた女の人も連れて横浜からアメリカに向かう蒸気船に乗った。

冬休みに入る前、ばあちゃんのすすめで毎週日曜日、小学校の先にあるお寺で書道を習いは

じめた。智恵は夏から通っている。

きれいに字が書けることに興味はなかったけれど、帰りに町営バスを待つ間、近くの雑貨屋でカップラーメンを食べるのは楽しい。

壁ぎわの細長いテーブルに並んで座る。智恵は母親が朝早くから仕事に行ってしまったから朝めしを食わずに出てきたらしい。お湯を注いでもらったばかりのカップを手のひらでつつむと温かい。

プラスチックの置時計の秒針を確かめた。ここから三まわり。

「ねえ、おばあちゃんと二人つてたいへん？」

割り箸をカップの上に横置きにした智恵がこつちを向いた。

「んたらごとはねよ、ただ……」

「ただ、なに？」

「茶色い料理ばかりだから……ハタハタの焼いたやつだとか、きりたんぽとか」

黒い秒針をにらみながら、ため息をついた。

ぼくは母ちゃんのクリームシチューが食いたい。

にんじん、ジャガイモ、玉ねぎ。いつも赤いソーセージを入れてくれた。皮だけが赤くて中

は肉の色をしている。赤いソーセージとだいたい色のにんじんが、バターが入って白くてとろとろしたスープに気持ちよさそうに浮かんでいる。ほんとうは鶏肉でつくるらしいけど。

鶏肉は嫌いだ。

ばあちゃんが家の鶏を絞めるのをなんでも手伝わされた。羽根をむしった鶏をばあちゃんがナタみたいな包丁でばらして、黄色い脂肪やピンク色の内蔵から立ち上ってくる臭いを嗅いでいるうちに肌という肌に鳥肌が立った。それを知った母ちゃんは、代わりにソーセージを入れてくれるようになった。

でもばあちゃんの料理に文句は言えない。

それに……父ちゃんがいらない自分は自分がしっかりしなきゃいけない。きりたんぼやだまこもちをやるとき、ばあちゃんは卓上コンロを使うけれど、つまみをひねってもなかなか火がつかない。マッチの火を近づけるのだけれど、その手が震えていることがある。いつかガスが爆発しそうだ。

ねえ、と言って智恵が箸を手にした。

「もうそろそろいいんじゃないの？」

「だめだ」

秒針はまだ二まわり目に入ったばかりだ。

冬休みに入って最初の日曜日。きのうから降り続いた雪がこんもり積もっていて、こんな朝は町営バスはこない。智恵は、今日はお母さんと出掛けるから書道は休むと電話してきた。

ほぐした塩鮭をのせて朝めしをかきこむと玄関を出た。

白と灰色しかない景色の中で庭の柿の実だけがぼつんと赤い。

マフラーをしつかり巻いて、膝の近くまで積もった新雪に足を踏み出した。

ずきゅきゅきゅきゅつ、ぎゅきゅきゅきゅつ……。

白く染まった田んぼに囲まれた道なき道を進んでゆく。

ずきゅきゅきゅきゅつ、ぎゅきゅきゅきゅつ……。

なんだか雪が歌っているみたいだ。

「はっけむは井内の少年団、石川翁いしかわおとうの習いをば、習いをば！——

太鼓に合わせて無理やり覚えさせられた夜宮の歌が口をついた。

石川理紀之助翁というのは農業の神様らしいけれど、武埜三山とおんなじで顔も見たことがないし何をやったのかも知らない。でも、なんだか自分まで立派になったような気がした。

丘の上までできた。長靴の中まで雪が入ると片足立ちになって、脱いだ長靴をさかさまにし、靴下へはばりついた雪の粒をひとつひとつ指で払って足を突っ込んだ。もう寒さは感じなかった。スキーズボンの裾にも雪が団子みたいになって張りついているけれど足は軽い。膝まで埋まる足を引き抜くのも苦じゃない。どんどん歩ける。乾電池を直列つなぎにしたモーターになったみたいだった。黒々と凍った沼で身を寄せ合っているマガモのつがいを横目に見ながらさ  
らに歩く。

首と背中があつくなくなってきてマフラーを外した。

振り返ったら雪の上には自分の足跡しかなかった。

野ウサギが行ったり来たりした跡もない。

この世界に自分ひとりしかないなかった。

見上げた空には雲がひとつもなかった。この澄んだ青はきつと地球の裏側まで続いている。

とそのときなにかがひらめいた。

丸石の自転車。スーパークーシフトとダブルライトのやつ。

このへんの男子は中学生になるとああいう自転車で通学する。秋田駅は奥羽線で五つも先だけれど、役場の先まで出れば国道が走っている。まっすぐ南に向かえば八橋の街がある。自転

車なら……脚が丈夫ならどこまでも行ける。春になったら自転車を買ってもらおう。

母ちゃんにはきつと事情があるのだ。だったらぼくが会いに行けばいい。これはそのときのための練習なのだと言い聞かせ、雪の原っぱを進んだ。

年が明けてすぐ、父ちゃんががきを送ってきた。

仕事がいっぱいあるから長くやってくれと親方から頼まれている。もしかしたら三月まで働くかもしれない——下手くそな字で書いてある。ぼくは「かっこいい自転車がほしい」と返事を書いた。

フォッグ卿一行はアメリカに上陸した。先住民に襲われながらもニューヨークに着いたけれど、こんどはイギリス行きの蒸気船に乗り遅れてしまう。でもひるまない。フォッグ卿は大胆にも商船を買って、リバプールという港町を目指している。

一月の三学期が始まると、町営スキー場で体験授業があった。節子先生にかっこいいところを見せようとしたのがまずかった。

先生を追い抜いて直滑降をし、スピードが出たところで左に曲がろうとしたら、凍った雪面を板が踏んだ。ガリガリッと音がした。尻が後ろに置いていかれて足が浮いた。どこかに突っ

込んだ。すごい力で引つ張られて身体が回って、顔に雪煙が降りかかってきた。

次の日。右の足首が腫れて歩けなくなった。

武志の母ちゃんに車で町の診療所に連れていかれ、医者にねん挫だと言われ、大げさだと思っただけれど何日か学校を休むことになった。

休みが三日目になった土曜の午後。一週間分の宿題のプリントを持ってきてくれたのは智恵だった。ばあちゃんは今日も寄り合いだ。

智恵を居間に座らせ、コップに注いだファンタオレンジを出した。

「ほら、もう大丈夫だから。月曜日には行ける、学校」

まだ痛いけれど、無理して歩いてみせた。

「ねん挫ってのは無理したらまた悪くなるんだ。しばらくはおとなしくしてなさい」

「おめ、賢<sup>さか</sup>しいなあ」

智恵はリングみたいな頬にえくぼを浮かべながら、診療所のはげ医者とおなじことを言った。

「んたらことよりね、節子先生、だんなさんと別れるかもよ」

「なんだど？」

「したから別居してんだって。出ていったんだよ、町営住宅」

「だれが？」

「だんなさん」

紅白歌合戦でえっちゃんの隣でギターを弾いていた男の人の白いシャツがよみがえってきた。  
た。

だんなさんは秋田市内の会社で働いていて、いまは身体を悪くして入院しているんだってばあちゃんは言っていた。

「節子先生ってさ、たまに授業休むでしょ？」

そういえば先月も一度そういう日があった。

「お見舞いでねんだが？」

「違うよ、裁判所だよ、秋田の」

「なにそれ」

「家庭裁判所ってところ」

「なにしてるの？」

「ばかだねえ。夫婦のことをどうするのか話し合ってるんだよ」

智恵の赤い靴下に白っぽい毛玉が浮いている。

薪ストーブの火がはぜた。

智恵がテーブルのプリントを一枚取りあげた。

余白に鉛筆で〈離婚〉と書くと、そろそろ帰るねと言った。

週が明けた月曜日。教室に現れたのは教頭先生だった。

「節子先生はご家庭の事情でお休みです」――。

斜め前にいる智恵がぼくを振り返った。

うんうんとでも言うように首を縦に振った。

今朝は武志の母ちゃんに車で小学校まで送ってもらっていた。帰りも迎えに来てもらうはずだったけれど、ぼくは授業が終わると家とは反対の方に歩き出した。町営住宅は書道で通ったお寺の近くだ。足がまだ痛いけど、鼻から息を吐きながら鏡みたいに凍った道を歩いた。どうしてかわからないけれど、いま行かなくちゃだめだと思った。

町営住宅の前まで来た。四つ並んだ郵便受けを見る。102号に先生の名字があった。

いつもの赤い車がなかった。

サッシ窓には人影もない。

風が出てきたから駐輪場でしゃがんだ。ときどき立ち上がって道路の先に目をこらす。

かちかちに凍った地面に雪が落ちてきた。急いでいたからマフラーを学校に忘れてきた。手袋をしていない手に息をかけた。

空が暗くなってきた。雪が横殴りになってきた。アノラックを着て毛糸の帽子もかぶっているけれど、足踏みをしていないと凍えそうだ。

風も強くなってきた。雪がツバメみたいに地面をかすめて巻き上がり、碎ける波みたいに押し寄せてくる。

我慢できなくなつて町営住宅の裏で小便をしてしまった。ちんちんをしまおうとしたら役場のサイレンが鳴った……五時だ。

もう帰ってしまおうかと思つたとき、赤い車が近づいてきた。

ドアが開いた。オーバーをひるがえして先生が駆けてきた。

身体じゅうがかじかんでいて言葉が出てこない。

「とにかく入りなさい。さ、はやく」

先生はぼくの雪を払ってドアを開けた。

部屋に入るとストーブにマッチで火をつけ、ぼくを低いテーブルの前に座らせた。

先生は冷蔵庫からなにか出したり、コンロに鍋をかけたり、テーブルを拭いたりしている。

「はい、これ。ホットミルク」

カップを受け取った手にぬくもりが広がっていく。鼻水をすすりながら一口含むと砂糖の甘さが舌の上を転がった。

「どうしたのこんなところまで？」

「……なんも」

「おばあちゃんは知ってるの？　ここにいてるって」

ぼくがまた首を横に振ると、節子先生はバッグから手帳を出して、黒い電話の受話器を握った。

「確かに町営住宅に、わたしの……さあ、わたしにも……とにかく、落ち着いたら送っていきますのでご心配なく、ええ」

先生が受話器を置いてぼくのほうを見た。

学校が終わってからここで待っていましたと伝えたら、腹がぐううと鳴って先生がふふっと笑った。

「ちょっと待ってて」

先生は台所の壁から黄色いエプロンを取って肩からかけた。

「なんだか落ちつかない。正座をすると先生は「ばかねえ。あぐらでいいよ」と言って、流しの蛇口をひねった。

ぼくは上目づかいにあちこちを見渡した。

台所の奥の部屋に段ボール箱が積んである。一つ、二つ……五つ。その後ろ、カーテンをつる棒に服がぶら下がっている。ねずみ色とか紺色で、武志の父ちゃんが着ているようなやつだ。

「あの、先生……これって」ぼくが先生のほうに目をやったとき、

「はい、お待たせ」

先生が茶色くて大きい皿を差し出してきた。

クリームシチューだった。

「ごめんね、昨日の残りものだけどソーセイジだけ足したの。あ、玉ねぎって大丈夫だった？」

うなずいてスプーンを手に取った。

赤いソーセージとにんじんが気持ちよさそうに浮かんでいる。

ひと口含んだ。ソーセージの赤い皮がぶちっと破れて舌全体に幸せな感触が広がっていく。にんじんは甘くとろけていく。

先生は花びらみたいなくちびるに笑みを浮かべ、ぼくが食べるのを見ている。この部屋は椿の花みたくない匂いがしていると気がついた。

二度、お代わりをした。

風が鳴っている。コップに注いでもらった冷たいオレンジジュースを飲むと、あとはするこ  
とがなくなってしまった。

テーブルの置き時計は六時を回っている。

「そろそろ帰ろうか。おばあちゃん心配してるでしょう」

ぼくはジュースの最後のひとしずくを流しこんだけれど、すぐにコップをテーブルに戻さないで手のなかに包みこんだ。

コップに目を落としながら小さな声で言った。

「だんなさん……」

立ち上がろうとしていた先生の手でキーホルダーが鳴った。

「病気だって、うちのばあちゃんは言ってたけど？」

「うん、さっき会ってきたんだ」

「……病気って？」

先生がまたテーブルの向かいに腰をおろした。

「うーん、なんていうのかな、心の病気のひとつって言ったらしいのかな……でも、薬を飲んだらすぐに治るようなものでもないし、薬を飲まなくちゃいけないようなものでもないのよ……世の中にはよくあるっていうのか、でも、ないほうがいいんだらうけど」

なぞなぞみたいな説明だった。

先生はキーホルダーをテーブルに置くと、そこに両ひじをついて、組んだ指にあごをのせた。

智恵がプリントに書いたあの二文字が浮かんできた。

いましか聞けないような気がした。

「あの……先生のだんなさん……別の女の人と暮らしてるって言うてる人がいるんだけど」

先生のまつ毛が、ぱぱぱと動いた。

鼻で息をする音がしてきた。

先生が頬にこぼれていた髪を耳にかきあげた。

「そう。夫には好きな人がいるの」

赤い置き時計の針が動いている。

先生の顔を見ては悪いような気がして、段ボールが積まれた奥の部屋に目をやった。

「……あ、あれね、郵便局から送るの、その背広……しかたがないことってあるよね……健太くんもいつか……わかるよ」

風の音に消えそうな声だった。

うつむいた先生が指の先を目に当てた。

「健太くん、お母さんいなくてさびしい？」

先生が空っぽになった茶色い皿を見つめている。  
ぼくも。

顔を上げた先生の目はうるんでいた。

「先生もね、さびしいの、ほんとは」

先生の指の先がまた目頭を押さえた。

「健太くんだって悲しいときは泣くでしょ」

「泣がね……だがら先生も」

静かに鼻をすする音がふたつ、重なり合った。

「さ、行こうか」

軽乗用車のフロントガラスは雪で凍っていて、先生はエンジンをかけたけれどすぐには走り出さず、ヒーターを全開にしたまま両手を合わせてふとももの間にはさんだ。

息を殺していると、先生が前を向いたまま言った。

「三月でここをやめて転勤するの。湯沢の小学校に」

湯沢市は先生の生まれ育った街だ。

「やり直すの。教師の資格があればどこでも働けるから」

きゆう、きゆう、きゆう、きゆう……。暗がりの中、ワイパーだけが大き儀そうに動いている。

車のごとと音を立てながら雪道を走り出した。

大きな道を外れて、ぼくの家に続く細い道に入った。

「除雪車、あんまり来ないみたいね」

先生が前かがみになった。タイヤがわだちと段差を越えるとき、頭までぐらりぐらり揺さぶ

られてぼくは座席の端をつかんだ。身体を固くして背中と尻をシートにお圧しつけていると無性に腹立たしくなってきた。

おどなは勝手だ。

雪の間から小さなキャベツみたいなフキノトウが顔を出し始めたと思ったら、また雪まじりの嵐がやってきて、空が明るくなったり暗くなったりした。春なのか冬なのかよくわからない。

フォッグ卿は警察から釈放されてロンドンにゴールし、旅をともにしてきたインド人の女の人と結婚式を挙げた。きのう、やっと本を読み終えたぼくの前に、出稼せぎから戻ってきた父ちゃんが慣れない服を着て機嫌良さそうに居間の座いすに腰かけている。

「自転車屋行ぐが、あした。約束だからな」

手じゃくでビールをついだ父ちゃんが指にタバコをはさんだまま言ったけれど、ぼくは綿わたぼこりがついた蛍光灯のひもが揺れているのを見あげている。

「なした？ ほしいって書いてたべ」

「なあ父ちゃん」

「ああ、忘れてねよ」

「……いや、自転車のごとくではなくて……もう戻ってこねんだよね、母ちゃん」

父ちゃんは座いすをきしませながらコップの中身を一息で飲むと、タンツと音をさせてちゃぶ台に戻した。

「……悪がったな、いままで黙ってで」

ネクタイをしている父ちゃんの顔は、いつにも増して窮屈そうだ。

蛍光灯がじじじつと鳴った。

台所ではあちゃんが包丁を使っている音がする。

「おれ、自転車、もういらね」

うつむいていた父ちゃんが顔を上げた。

日に焼けた手のひらで顔をぬぐった。

「代わりに買ってほしいもの、あるんだども」

父ちゃんが赤くなった目で見つめ返してくる。

「野球のグローブとバット。グローブは革のやつ」

雪が溶けたら武志たちと野球をやる。投げるのも打つのもうまくなって、中学生になったら

野球部に入るのもいい。

父ちゃんは、んだが、とうなずくとビールをまた自分で注いだ。

ばあちゃんが両手で抱えるようにして土鍋を運んできた。

ぼくはそのきりたんぼの鍋を受け取ると卓上ガスコンロにすえた。マッチの小箱から一本抜くと、箱の横をこすって火をつけて、左手でつまみをひねりながらその火を近づけた。ぼわつと青い炎が広がるとばあちゃんが、ほほほおーと驚いたように笑った。

やがて鍋がぐつぐつと煮えだした。

「なんとだ、味？」

「んめよ」

「いっぺ、け」

何カ月かぶりなのに、ふたりともあまりしゃべらない。

黒い壁時計がカチツ、カチツ、カチツと時を刻んでいる。

ぼくは思い切って鶏肉を噛んでみた。皮だけは箸で外してから。

つゆがしみていて柔らかかった。

食い終わると、ちよつと散歩、と言ってジャンパーを着た。

道路の端にしぶとく残っている堅雪を長ぐつで蹴りながら歩く。

町はずれの小さな橋の上で足を止めた。

夜というにはまだ早い空を見上げた。

大きな月がかかっている。

顔を戻すと岸の雪が青白く光っていて、雪どけ水を含んだ瀬が鳴っている。イワナが釣れることもあったこの川も、来年から岸がコンクリに変わると武志が言っていた。

鼻で大きく息を吸ってみた。

稲を肩にかついでいたときの練乳とワラが混じった、あの匂い。

えんじ色のセーターでかいだ、あの匂い。

けれど……。

いくら鼻をひくつかせても、湿った土と枯れた杉の葉っぱのにおいしかなかった。

ズボンのポケットからピンク色の紙きれを出した。

月明かりでも文字は読めた。

欄干に歩み寄って川を見おろした。

紙きれを指先から離した。

川面に落ちてゆく紙切れは釣り針にかかったイワナが身をよじるみたいに揺れながら、すぐに見えなくなつた。

——だれかの声が出ている。

……一面は参院選の読み物とウクライナ。コロナは社会面で……

——そんな時間か……。

……ではそういうことで。

背中の方でいくつもの足音がした。今夜最後の編集会議が終わつたらしい。目をこすると椅子の背もたれを戻し、新聞記事編集用のデュアル・ディスプレイ画面に視線を走らせた。

幸いなことに、デスクのぼくが目を通すべき原稿は一本も入電していなかった。

あと一時間もすれば日付が変わる……とすると一〇分近くも居眠りしていたらしい。

目頭をもむと顔を窓に向けた。

ビルの群れの先で赤い東京タワーがついさつきまでと同じようにだいたい色に染まっている。仕事が一息ついた夜、あの光を眺めているとクリームシチューを思い出すことがある。

赤はソーセージ、だいたい色はにんじん。

世界中の事件取材したいと思つていたけれど、世界一周どころか、行つてみたい場所を数

えているだけで記者としての持ち時間が終わってしまった。そうしている間に子どもが大きくなり、やがて離婚することになり、ぼくは自分の身勝手さも知った。

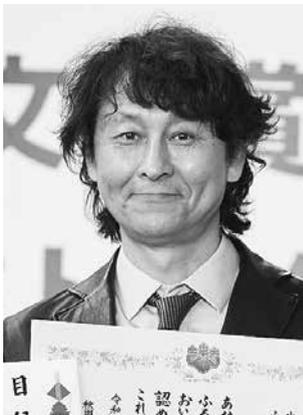
小説の部 ふるさと秋田文学賞 受賞者のことば

わたしの、ふるさと秋田

青山 トーゴ

ガラス張りの豪華な会場で表彰式を終えたわたしは、引き続き行われるトークショーを聴くため舞台から二列目に座らせてもらったものの、芥川賞作家・又吉直樹氏の思いのほか厚みがある身体じたいがしゃべっているような艶のある声や巧みな語りよりも、目の前のパイプ椅子に腰かけていた白髪で瘦身の県議会議員の革靴のかかどに目が吸い寄せられていた。靴底ではなく、かかと。白くかすれていた。黒い革靴なのに……。無遠慮に目を凝らす。靴底はすり減っていない。補修を重ね、長い間たいせつに履き続けているのだろうかと思った。

十八歳まで暮らした井川町の家にあつた靴箱を思い出した。祖父の革靴もそんなふうだった。自分の仕事と決めてい



たのか、米寿を過ぎても自転車をこいで、田んぼの水回りと草刈りをやめなかった。雨の日は合羽を着て、細い腰に鎌をさして出かけた。だからゴム長靴を履いている姿しか記憶にないけれど、大人になって帰省したときも、その革靴はいつもそこにあった。

さきごろ東京で引越しをし、祖父のモノクロ写真が出てきた。どんぶくを着て、両手に目を落としている。大きな手だ。無骨な指をしていた。わたしはそんな手で育てられた。

表彰式の場で、秋田の子どもたちに読書の素晴らしさを広めるため、さまざまの方が奔走され、ふるさと秋田文学賞も誕生したとうかがった。

わたしはこの賞に五回応募することになった。作品を書くことは、子どものころの自分や、ふるさとを離れてしまった自分と向き合うことでもあった。楽しかったことも悲しかったこともあった。思い出したくもないことも。けれど、そんな場面や気持ちを言葉に移し替えながら、こうした記憶こそ、かけがえないものではないかと思うようになった。

そして、帰れる場所がいつもそこにあるということも。

ふるさと秋田文学賞を生みだしてくださった皆様と選考委員の先生方、かかわってくださったすべての方々に心よりお礼申し上げます。



第9回ふるさと秋田文学賞 小説の部

ふるさと秋田文学賞佳作

## 浮遊する水

山本郁人・作

浮遊する水

あとになって大切だったと気づくのは、こういうものかもしれない。カーテンの隙間から漏れ出す光を眺めながら、そんなことを思っていた。昨日の夜、眠りにつく前の空気と比べて、ここにはなにかが不足しているように感じる。夢は見えていた気がするけれど思い出せない。たとえば夜のまどろみのなかに見る、永遠とかを信じたくなるようなあの成分が、眠っているうちに溶けてなくなってしまったような。もしも失ったそれを取り戻すことができたなら、なにかが変わるだろうか。だけどこんな感覚も、いままで何度も経験してきたかもしれない。そう考えると、この不足も大したことではないだろうと思った。

P M 3 : 10。携帯を見て思考の全てが覆り、意識が朦朧とする。またやってしまった。

「恵比寿の喜多方ラーメン」

大学の連れの陽平からのLINEが一件。大学を休むと彼にラーメンを奢らなくてはいけないという謎の契約を思い出す。これで何日目だろう。数秒考えて、今日一日のすべてを諦めるという思考に至った。

ペランダに出て煙草に火をつける。東京の冬の天気は安定しているが風が強い。吐き出した煙が押し戻されたとき、小学生の頃、悪玉先生に少数の掛け算を隣で教えられたときのあの妙な臭いを思い出した。コーヒーの臭いの後ろから硬い物体が追いかけてくるような、とにかく

不快な臭い。小学生の僕は彼の黄ばんだ歯とその臭いと小数点から悪玉という言葉が結びついた。あの臭いの正体が煙草だったと知ったのは自分が喫煙者になってからだ。

『お元気ですか？ 六年一組のクラスだったみんなと成人式のあと、クラス会を開催したいと考えています。ぜひ大人になったみんなを祝福させてください。』

ベランダの隅に置きっぱなしにしてあるハガキ。悪玉先生からだ。成人になることを喜ぶのはなぜだろう。二十歳まで生きたことを喜んでくれることで、世の中がどれほど生きづらいかを大人たちが暗に教えているのか。いや、そんなはずがない。きっといつだって言葉が先にあるのだ。誰もがいつからあったのかもわからないその言葉のなかだけで喜ぶのだ。言葉より先に存在するものはこの世界にあるのだろうか。六年生になる前に引越した僕にこのハガキを送った真意はなんだろう。僕には出席する資格も度胸もない。

トイレに入り、用を足さずにレバーをひねる。便器のなかでは渦を巻いた水流が水位を上げこちらに迫ってくる。一瞬、どうしようもない不安に駆られた。全身の鳥肌と同時に寒気に襲われる。水はぐるぐると回りながら、唸るような轟音で僕の心を圧迫してくる。震える手を抑えながら慌てて便座の蓋を閉める。落ち着け、いつものことが起きているだけだ。音はすぐに

過ぎ去り、雷雨が過ぎ去ったあのような束の間の静寂が訪れたとき、ようやく安堵感が僕の内部まで到達した。

毎年冬になるとこのような一過性の発作が起きる。その度僕はある種の自己肯定に包まれる。それでいい。まだ忘れるな。この苦しみを通り過ぎずにちゃんと立ち止まれ。という指令に忠実に体が反応する。これはなにかに似ている、心のなかでそう思った。ああ、鬼だ。子供の頃、それも冬になると勝手に人の家に押し入り恐ろしい形相で子供たちを威嚇する、あの鬼と似ている。「泣く子はいねがー」と一年に一度警告することで、子供に恐怖を植えつける。それを忘れたら再びあの災害が訪れる、と。

秒針をゼロに戻すみたいに十年が経過してからさらに一年が過ぎようとしている。あれから何年、などと過ぎ去った時間を世間の同情の煽りに使うテレビのニュースを見ては動揺を覚えた。風化させないために、などと言う言葉のあいだには、少しずつ忘れていこう、というニュースが含まれている気がする。僕はその度に『忘年』という言葉の不思議さを思い出す。嫌なことはどうして忘れたほうが良いのだろうか。すべて引き連れて生きることになんの問題があるのか。そんな風に思いながらも、実際は忘れてしまったものも少なくない。感じた痛みも、記憶も、時の流れと共に引き剥がされていく。その実感が確かにある。だからこそトイレの水

なんか怯えてしまう自分自身に安心したりもする。

階段を降りて洗面所へ向かい、両の手のひらにお湯を溜めて顔を埋める。トイレとは違いコントロールが効く水量が額の皮脂と混ざり合う。

僕が通っていた秋田市の小学校は、大きな揺れは感じたけれど、教卓の横の小さな本棚が倒れた程度で、大きな被害はなかった。むしろ停電という滅多に経験できない学校の暗さに僕たちクラスメイトの胸は躍っていたように思う。あんな凄惨な大震災の只中でありながら、その裂け目の内部の暗さに居心地の良さを見出していた。人生に原風景というものがあるとするば、人はそういう瞬間を想うのかもしれない。あの日に持つイメージとして、それは間違っているかもしれないけれど、それほど濃密な時間があるそこには流れていた。水に触れているあいだ、瞼の裏で二人の顔が結ばれた。いつもクラスの中心にいたなおくん。もう一人はようやくやんという僕が転校するまでのわずかな期間しか関わらなかつた女の子。どちらも楽しそうな笑顔が急速に歪みはじめ、いまにも泣き出しそうになったところで消え去った。僕は慌てて蛇口を止めて顔の水気を犬のように切った。目の前の鏡に水が飛び散る。反射する自分の顔はお湯によってわずかに赤らんでいた。こけた頬のところどころに髭が混じっていて、明らかに成

人とは異なる古びたものを感じる。いったい僕はなにがしたいのだろう。洗面台の横にある小窓に差す夕方の柔らかい光を見て、なにかも嫌気がさした。

大学二年になってから欠席が増えた。単位もすでにくつか落としている。元来、僕は与えられた責任やらなくてはいけない期限などをきちんと守れるようにはできていない。それも一年のときは毎日の学校やテスト勉強という大学生の日課を丁寧になした。しかしそれはいつか破綻してしまう自分を知った上でのまやかしの過ぎなかつた。厳密に言えばサボる、というのではなくできなくなる、のだ。昔から人が当たり前前にできるような真剣さを長期間継続できたことがない。自分に課したものが大きい人間ほどそうなるなどよく言われるが、僕の場合、決して自分に何かを期待しているわけでもない。偽悪や荒廃を装いたいわけでもない。ただなにもしたくない、そういう時期が周期的に訪れるのだ。

居間はファンヒーターの石油の臭いが薄く漂っていた。母は夕食の支度をはじめていて、目が合うと「おはよう」とだけ簡単に言った。ダイニングテーブルの上にラップにかけられた朝食が置かれていて、茶碗は裏返しにされている。僕はそれを温めて母が米を盛る。ありふれた食事と生活。

去年、夏休みを使って二週間泊まり込みのバイトに参加した。人生で一番長い外泊だった。帰宅した朝に母の卵焼きをひとつくち食べたとき、なぜか泣き崩れそうになった。母の味というにはあまりに淡白な料理だったけれど、いつの時代も母親が作るその味が、外でどんなに傷ついていた子供でも家庭に戻し、生かしてきたのだろう。

「具合は、少し良くなった？」と母が言った。僕は「なんとなく」と曖昧に答えた。三日前から母は大学へ行かないことを咎めなくなった。不思議な静けさのなかでただ見守っている。父の帰りが遅い分、会話がないうその空間はより際立つ。

母以外、この家には僕を咎める人がいない。父は昔から、特に僕の教育や将来については無干渉だった。国家公務員の息子であるからといって勉強を強制してくることもなかった。一度だけ、高校の進路選択のとき、やりたいことがなにもない僕にそれらしいことを話したことがあった。

「大学は人と出会う場所だから、その人たちから学ぶものがきつとある。もしいまなにもやりたいことがないなら、行ってみてもいいんじゃないか」

結局、その言葉に引く張られる形で大学進学を決めた。父は仕事に人生を捧げてきた典型だが、休みの日は家族でよく出掛けたものだった。寡黙でなにを考えているかわからないけれ

ど、家庭と仕事どちらにも妥協することを許さなかったのだろう。そんな父が近ごろ、日々なにかを急ぐように仕事に没頭している。社会人のラストスパートというものは皆こうも走らなくてはいけないのだろうか。父のような大人になることは、きっと僕にはできそうにない。

大学で出会った人間から見えてきたものがあるとすれば、彼らは丁寧に人生をやっている。ただそれだけだった。周りにはバンドで定期的にライブを開く者や、先輩たちと共同出資して起業した者もいる。彼らは決まって人生の短さなんかを語り出すが、惰性で生きることのなにかが悪いのだろうと僕は思う。平凡でなにかいけないのだろう。人とは違う、クリエイティブなことをしなくてはいけないのか。なにも考えずにいたら生きて、たまに過去の一時期なんかを顧みる、そんな人生があってもいいんじゃないか。人間は成熟していかなくてはいけないのか。ただ生きていくだけで賞賛される世界はどこにもない。

テレビの向こうでは、青森訛りのタレントが訛りながらがこの食レポをしていた。土地と土地が混ざり合って、僕の頭では『混血』という文字が浮かんだ。聞き馴染みのない言葉で表現される秋田の味は、どこか遠い国のスパイスが効いた料理にも見える。僕は卵焼きの最後の一切れを咀嚼しながら「ごちそうさま」と呟いた。母は黙々と夕食の支度をしている。なんとなくリモコンのスイッチを切って部屋を出た。

『さっくんへ

ほんの少しのあいだしかいっしょにいられなかつたからさみしいです。わたしは出会った人たちのことを一人も忘れたくないです。いつかどこかで会えたら、笑って話とかしたいですよ。』

『さっくんへ

ようちゃんとさっくんと三人であそんでたのしかつたよ。東京にいつてもわすれないでねなお※』

東京へ引越すとき、同級生の何人かがくれた手紙。ようちゃんとなおくんのものしか思い出せないし、いまでは二人の本名も忘れてしまった。手紙がどこにあるのかもいまではわからない。

全校生徒が二百名にも満たない小さな小学校のもっと小さな共同体。それが僕の居場所だった。地震から約一月後に僕たちは五年生になった。余震や復興と、目まぐるしく変化する世界のなかで、ここだけが取り残されているように平凡な日常だった。がんばれ東北、などと言われても、僕たちが住んでいるのは東北であって、東北ではなかつたように思う。あの日僕たちが見た景色は大災害ではない。僕たちがいた場所は被災地でもない。あのとき東北に住んでい

たというだけで同情されるのはなぜだろう。あの日の夜に母のワンセグ携帯で見た、町が飲み込まれてしまうほどの恐ろしい現実には僕たちにはない。あの日から東北の人たちに根付かせたものがあるとすれば、それは広い意味で使われる「被災者」という意識だ。被災者とそうじゃない者、そのどちらからも溢あふれてしまった僕たちは一体何者なのだろう。

変わらない日常の唯一の変化といえば、福島からようちゃんが転校してきたことだった。一年生から秋田にいる僕にとって、はじめて外部からやってきたのがようちゃんだった。彼女は驚くほどの速さでクラスに溶け込んだ。それは彼女の性質に由来するものだった。

『純真』と『気遣い』一見相容れないように見える二面性をようちゃんは持ち合わせていた。

「わたしでよかったら」

というのが彼女の口癖だった。

「わたしでよかったら、一緒に遊ぼう」

「手伝おうか？ わたしでよかったら」

完全なる謙譲。提案でも要求でも、彼女の意志というものは常にその外側にあった。相手に全ての権利を委ね、自分はただそこにいるだけ。しかし外側だけで可憐に振る舞う彼女に、

僕たち同級生は少しずつ惹きつけられていった。なかでもなおくんにとっては、特別美しく見えたのだった。少年野球ばかりに打ち込んでいた彼が、おそらくはじめて抱いたであろう恋心は、誰の目にも明らかだった。僕たちが三人で一緒に遊ぶようになったきっかけはなんだったろう。いつだったか、なおくんが話していたことを思い出す。

「さっくん、おれ大人になったらようちやんとけっこんする」

「気が早いって、まだ小学生だよおれたち」

「けっこんする相手をもう決めるのはぜんぜんいいべ、ようちやん海が見えるところ住んでたら海が好きなんだってさ、だから二人でそういうところに住むんだ」

「ようちやんにも決める権利あるだろ、ひょっとしてなおくんじゃなくて、おれだったりして」

「言うなよそんなこと、あれ、さっくん？」

「うん……大丈夫」

「そうじゃなくて、なんで泣いてるの？」

「ううん、少し……眠いだけ」

「それなら、少し眠ればいいよ」

息が深くなつて臉が重くなつてくる……

ようちゃんは美しい。なおくんも僕もそう思う。ブランコ椅子の軋み、シンクに流れる水面、幼い頃に聞いたようなそれらの音と、ようちゃんの声が同時になじんでいくように感じる。三人は学校や公園で遊んだり、ときには自転車を隣町まで走らせては、夕暮れに染まる夏の海を眺めたりしている。いま考えるべきことはなにも考えないことであると、三人は示し合わずなくても知っている。悲しみも痛みも、いまだけは忘れてしまつて、ただ目の前に浮遊する薄紅色の水を眺める……

空を溶かしたようなあの青い湖も三人は一緒にいる。昨日の夜に家族で作ったレモネードをそれぞれ飲み比べる。飲み終えたら水際に立つて少しずつ水に近づいていく。わずかな波が僕とようちゃんの足の先に触れたとき、なおくんだけ走って飛び込んで、空に浮かんだきらきら光る水しぶきが永遠みたいに止まつて見える……

水のなかで息を止めると、心臓の音が聞こえてきて、少し苦しくなつて顔を出すと、世界が

隠しているあのきらきらした輝き。疲れ果てて眠っているようちゃんの寝息と、湖の波の音だけの世界に僕もなおくんも耳を澄ます……

目を開けるとそこには濁った暗さ以外なにもなかった。夢を見ていた。そこになおくんとようちゃんがいたのは間違いないのだけれど、夢のなかの幸せな景色に実体が追いつかない。現実の彼らの記憶が、夢によってその輪郭をわずかに変えようとしている。だけどいま見た景色から本当のことが奪われない術がないかと考えはじめたときには、夢の世界はもう手の届かないところまで勝手に離れていた。色彩の一色一色が水に流されるように剥がれ落ちて、恍惚の感触だけが残った。涙がこめかみのあたりで固まっていた。遅い朝食を食べたあと、いつの間にか再び眠っていたらしい。食べたものが逆流して少し吐き気がする。まだ夜中ではないだろう。横になったままカーテンをめくると、暗さのなかにわずかに白が混じっている気がした。ふと外に出ようと思えば立ち、ベッドから起き上がるとひどい頭痛がした。夢の記憶はもうほとんど消えて、思い出せそうになかった。

暗闇のなか、クローゼットから当てずっぽうでコートらしきものを取り出す。部屋を出ようと扉を開けると、すぐ下に携帯が落ちていた。崩れ落ちるように眠ってしまったのだろうか。

記憶も、意識も、僕にはなにも頼れるものがない。うたた寝をしたときの、恋しい夢の世界に頼って生きることができたらどんなに楽だろう。だけど僕の目の前にはただ暗がりだけが広がり、遠くに伸びるなつかしい光には触れることができない。

玄関は居間からの光が眩しくて思わず目を細める。父はまだ帰っていないみたいだった。母が僕の影に気づき居間から声をかける。

「どこか行くの？」

「うん、すぐ戻るけど」と振り返らず靴紐を結びながら言う。母は「気をつけてね」とだけ言った。

空気が乾燥していて冷たかった。綺麗な音がする冬の風が正面から吹いたとき、体中の熱が斑に溶けていくみたいで、すぐに外へ出たことを後悔した。部屋から見た白さは確かに外の世界にも感じる。空は雪が降り出すのを予感させるようにその口を開けているみたいだった。僕は家の近くにある公園のベンチに座った。いつもより広く感じて、いま雪が降ったら、僕だけが消えてなくなってしまうのではないかと思った。

いつからか、家を出る前に母が行き先を尋ねるようになった。それならこれくらいの時間に

は帰ってくるよね、必ず帰ってくるよねとでも言うように。母は僕からなにかを感じ取っている。毎年起こる僕の発作が、きつと母にも見えない影響を与えている。

一週間ほど前、クラス会招待のハガキが届いてから、僕の一時的な発作は酷くなっている。まだ色付いている記憶。忘れてしまった記憶。忘れつつある記憶。それらが絡み合ってきた黒い物体が僕のなかに影を落としている。それでも僕は自らその暗さを引き受けることで、少しは楽になれるんじゃないかと思っている。

眠れない夜。今日よりも暖かくて星が鮮明に見えたあの夜も、いつか忘れてしまうのだろう。秋田にいた頃、外を通る車の光が僕の部屋へ一瞬入り込むのを見ながら、父と母が怒鳴り合う声をよく聞いていた。それはなんとなくトイレに行きたくなつて、階段を降りようとしたときだった。

「少しは家族のことも考えてよ、さくのことになるとなにも言わないで、勉強だつて遅れてるのに」

「勉強なんていつからでもやれるさ」

「甘いよ、あなたは」

「あいつ最近楽しそうじゃないか、友達と遊んで、なんだっけ、あの福島から来た」

「ようちゃん、あの子が問題なの」

母の口調が突然安定した。嫌な安定だった。いつか話すその言葉を待っていたような。

「あの子のお父さんあの発電所で働いてた人だって噂になってるの、町にいられなくなつてここに来たんだって」

「噂だろ、それにだからなんだっていうんだ」

「噂でこんな話が回らないでしょう、わたしだって原発にいたつてだけでなにか危険なものを持つてるとは思いたくないけど、だけどさくには元気で健康なままいてほしい、親だったら誰だってそう思うのは当たり前でしょう」

あの瞬間、僕のなかにあつた絶対的な部分が蠢いている感覚があつた。一番信頼している家族の口から出る、おそらく正しくない言葉の数々が僕の細胞に入り込むようだった。

あのあと、父にようちゃんと関わらないように僕に話してくれ、と母が言っていたのを覚えている。実際にそのあと父になにかを言われた覚えはない。しかしその代償に、僕は転校を余儀なくされた。八月の終わりに僕と母が東京へ引越し、翌年の四月に父も東京へ来た。その時差は父がすぐには転勤できなかつたためか、あるいは夫婦関係を修復するために必要な期間だったのか、僕にはわからない。ただどうやうちゃんから僕を遠ざけるためであつたことは確か

だろう。

あれ以来、僕はようちゃんという存在がなにか僕たちとは違う不思議な発祥の上に成り立っているのだと考えるようになった。言葉の途中でわずかに抑揚づくその訛りも、誰に対しても謙虚な姿勢も、ようちゃんという名前さえも、なにかとてもグロテスクな意味合いをもって僕に響いた。彼女は違う国の、たとえば戦争とか、人が死ぬこととかが当たり前の国で、生まれ育ったのだろう。そう考えることで、両親が話していた言葉を僕は飲み込むことができた。彼女は僕が成長する上で悪影響な子なのだと、そう自分に信じこませた。血の繋がりなどではない、なにか別の力に突き動かされるように。父と母があの日話していた内容が、つまりはようちゃんから距離を置くという理不尽さが当たり前として僕のなかに溶け出すころには、僕はすでにようちゃんとの関わりを絶っていた。

僕は両親を恨んだりすることはなかった。母が言ったとおり、誰だって自分の子供が一番可愛いし、対等に見ようとすると親がいたらそれはくだらない偽善と思うだろう。それにあのときの言葉を僕が気にも留めていなかったら、ようちゃんとの関係を続けられていたはずだ。引越などは問題ではない。そこにあったのは僕とようちゃんという個の関係だけで、すべて僕の責任なのだ。

それが三日前、あの夜のことをはじめ母に告げてしまった。大学を休んでばかりいることに加え、秋田のクラス会への出席はどうするつもりなのかと執拗に問いただしてきた。参加するなどでも言うのか。いまだに東北を蔑んでいるのか。思考がまだ不完全だった僕が、あのとき父と母の会話を無理やり咀嚼して飲み込んだ結果、いまの僕という人間を形成したのではないか。突発的にそう思うと、あれからずっと感じてきた後悔や悲しさなんか立体感を帯びて僕のなかに流れ込んだ。

「僕は秋田で暮らしたかった！ 外から来た人を手放しに受け入れる。そんな大人になりたかった！」

頭に血がのぼった僕は声を荒げて言ってしまった。母は頬を紅潮させたまま黙って僕を見ていた。八つ当たりだった。ようちゃんから離れたこともいま起きている発作も、なにかも僕が一人で引き受けなくてはいけない問題なのに。わかっている、感情的になった途端、自分の意志というものがなんの役にも立たなくなってしまう。これからは僕はこうやって取り返しのつかないことを後悔し続けるのだろうか。そして後悔の記憶を忘れたり、思い出したりしながら、そのたびにそれなりの感情になつて生きていくのだろうか。

空を見上げると、薄暗い雲が無秩序に浮かんでいて、それは夜でも見てわかるほどの速さで

動いていた。僕はポケットのなかにあつた煙草を取り出し、ゆっくり火をつけた。白い煙が夜空に揺れているのを見て、なんとなく体が凍えそうになった。

「おまえ、生きてるか？」

返信していなかった、陽平からのLINE。一年のはじめから一緒にいるが、僕たちはお互い、どれくらい本音で話せたことがあつただろう。出身地や趣味など、人間を知るための基本的な要素を、僕はなにも知らない。

東京に引越してからは、秋田にいた頃と同級生には、一度も会っていない。連絡を取る人間すらいない。それなのに僕の意識はどういうわけか、いまでも秋田にある。陽平のような東京の友人は時間で言えば圧倒的に長いのに、彼らは僕の生活から抜け落ちている。いずれにせよ、秋田も東京も、心の底から僕を受け入れてくれる場所はどこにもないように思う。

公園では、ジョギングウェアを着た若い夫婦がお互いの肩をつかみながらストレッチをしていた。動きやすそうな服装と白いマスクが不釣り合いな感じがする。もう見慣れてしまったマスク姿の人々にはなにか切実なものを、その最後の一言を隠している。ときどきそんな気にさせられる。彼らは大人しく様子を伺っている。この静寂さはいつか世界中で起きる巨大な爆発みたいなものの前兆なのかもしれない。そう思うといまが愛おしく思えたりする。

「今日は冷えるな」

家へ戻り洗面所で手を洗っていると、居間のほうから父の声が聞こえてきた。瓶ビールを注いでいる音もする。誰に向けられた言葉かわからず向こうを覗くと、ガラス張りの扉からは父の座る席だけ死角になっていた。テーブルの真ん中には鍋が置かれている。

「これから雪降るかもしれないでしょ、夕方のニュースで言ってたわよ」とおそろくキッチンの方から母が言った。居間から漏れる暖色の光は外側から見ても、ここが僕の家だとわかる。

「揺るがない場所をつくろう」

東京へ来てしばらくして、父がそう言ってこの家を建てた。転勤が多いからと言って、自分の家を持たない理由にはならない。自分の居場所が、帰る場所があるということの重要性に比べたら、他は大したことではないのだと言った。普段、主張らしい主張をしない父の言葉だったからそれはなんとなく僕の記憶に残った。転勤を繰り返してきたからなのか。東北で災害というものを強く意識したからなのか。あるいは他の場所から生まれたなにかなのか。動機はいまでもわからない。けれど父の大きな決断は身勝手なものではないと思った。その意志のなかに僕や母を含んでいて、僕はその愛に似たものに包まれている感触があった。家を建てて

から、父の転勤はなくなつた。この家は僕たち家族がこれからは住む場所を変えるつもりはない、という意志そのものだったのかもしれない。

扉を開けると、部屋のなかはファンヒーターの熱がこもっていた。入り口に立って鍋を確認すると、中身は湯豆腐だった。

「秋田のクラス会、やっぱり行けないよ僕には」

父と母、どちらにも目を合わせることなく僕は言った。部屋と廊下の境目に立ったままで、なかに入ることはしなかった。数秒続いた沈黙のあとで、母が「ごめんなさい」と小さく漏らした。その声は震えていた。

「お母さんもあのとき、なにも知らなかったから、大変な思いをしてる人を、知ろうとしなかったから……たださくのが心配で……わたし、あの子にひどいこと——」

「謝らないで」

思わず母の話を遮った。大きな声を出してしまつたせいで、耳の奥できーんという高い音が鳴り響く。僕は全身から溢れ出しそうになつたものを目を閉じて堪える。

「悪いのはぜんぶ……ぜんぶ僕だ……から」

自分の意思とは無関係に、子供が泣いたときの痙攣したような呼吸が声に混じる。いま泣き

そうになっているのがどうしてなのか、考えたけれどわからなかった。僕は思わずその場で俯いた。

「さく、お母さんもあのとき苦しんでたんだ、それだけはわかってやってほしい。いまさらだけど聞いてくれないか？ あのときのこと」

落ち着いた調子で言った父を一瞥し、僕は逃げるように風呂場へ駆け込んだ。脈拍が早まっていた。自分の呼吸がどのように行われていたかすらわからなくなりそうだった。母があのときのことを後悔するのはお門違いだ。ようちゃんを拒絶したのは僕。すべて僕のせいなのだ。傷つけたことも、いま僕がこれほど後悔していることも。父や母や、他の誰かがその責任を肩代わりすることは絶対に許さない。そうじゃないと、割りに合わない。いままで僕が苦しみ続けた記憶に、これからも苦しみ続けなくてはいけないのだ。人も、記憶も、時間も、甘い言葉で誘惑する。少しでも気を緩めればすべて失ってしまうような気がする。

外で冷えた体には、湯船のお湯は妙に熱くて、全身の皮膚が焼かれているようだった。背中が床と並行になるように体を傾け、耳までお湯に浸からせる。心臓の音だけが耳に響いて、すべてがそれ以外の世界になる。そうだ、悪くない。こういう感じだった。と、僕は一段一段引き出しを開けて探すように、水の上にあふあふと浮かんでいたときのことを丁寧に思い出す。

夏の日差しが一番暑い地点から降りそそいでいた時期、僕たちのクラスは遠足で田沢湖に掛けていた。引越しを二週間後に控えていた僕にとつては最後の秋田での学校行事だった。

僕は青くて透明な湖の上に一人浮かんでいた。すでにようちゃんから距離を置いていた僕は、いつのまにか一人になっていた。当然のことだ。他者から愛される要素というものがもし人間にあるとすれば、ようちゃんには到底及ぶはずなどなかった。とはいえ寂しさのような感情はまったくなかった。おそらく僕がしていることは間違いなのだと気づいていたから。罪悪感とまでは言わないまでも、ほんの少しの予感めいたもの。けれどそれが少し先の未来で暗い物体や穴のようなものに変容することまでは考えられなかった。

あの瞬間の関心は湖にあつて、他にはなにも頭になかった。僕はただ自分自身がこの深い湖と一致していくような感覚を味わっていた。海水とは異なるその水は、浮き輪がなければ沈んでしまいそうで、でもだからこそ人工物の完全さによつていまたしかに浮かんでいられる。僕の命はこの浮き輪のみが握っている。そう思うと自然の偉大さと生命の尊さ、という月並みな感想を抱くことができた。

「さっくん、よかったらわたしたちと泳ごうよ」

その日、僕がはじめて思考したのはおそらくこのときだ。ようちゃんが声をかけてきたと

き。しばらく触れていなかった声。表情。喋り方。背後にはなおくんや他のクラスメイト。担任の悪玉先生。大勢が向かってきたせいで波が大きく揺れた。

「わたし、さっくんとまた一緒に遊びたいな、もう最後だし」

他はただ黙ったまま浮き輪にもたれてこちらに体を向けていた。揃いも揃ってようちゃんの後ろで。気味が悪かった。彼らのなかには僕と同じようにようちゃんの噂を聞いている者もいるはずだと思った。ましてや先生が知らないはずはない。にもかかわらず平然を装って、みんな笑っている。なにも知らないみたいに。ほんとうは頭のなかはそれでいっぱいなのに。

「後ろのみんなもなにか言ったらいいじゃん、ようちゃんのかげにかくれてないで」

我慢できずに言ってしまった。彼らはそれぞれが簡単に笑っていた。後ろからなおくんが近づいてきて「いやさあ」と続けた。

「最近さっくんに避けられてる気がするってようちゃん言うから、そんなわけないから話してみなよって」ようちゃんははづが悪そうに「ははは」と笑ってみせた。

「要するにみんなようちゃんをうまく使ったってこと？　ようちゃんなら臭いものにふたができるからって」

誰もなにも言わずに波の音だけがしていた。結局はすべてを受け入れるようちゃんが便利な

のだ。

「先生」

僕が悪玉先生を呼ぶと彼は驚いているようだった。

「ようちゃんの家のこと、知ってますよね？ それにいまだって、ようちゃんは好きですべてを受け入れてるわけじゃないですよ、みんなようちゃんがこれだけいろんなことに気をつかっていることに疑問を抱かない。ただ受け入れて、吸い取って、これからだって知らないふりしていくつもりですか？」

ようちゃんが普通とは違うことはみんなわかっているはずだ。彼女の気遣いが飛び抜けていることを。不自然なことを。彼女は自棄を起こしている。他人をどこまでも尊重するが、自身は気にもとめない。僕はなんとなく、それはなにかに起因した、後天的な特徴であると思っていた。謙虚でいることしか生きられなくなってしまうたなにか。そんな彼女に悪意を持って近づく人間と、距離を置く僕ではどちらが内的に狂っているのだろうと思った。悪玉先生は黙って聞いていた。喋り終えて、どうせなら思っていることをすべて言ってしまうおうと言葉を探していると、突然なおくんが「わあー！」と大声で叫びながら水面をバチャバチャと何度も叩いて水しぶきを上げた。その波に押されて、全員の居場所がなおくんから遠ざかる。

「どうしたらいいんだよ……ようちゃんが苦しんでることとか悩んでることとか、なにも知らない、知ることができない……僕たちはなんもなくしてないし傷も負ってないから、ほんとうに辛いところにいる人によりそうことができ……はずがしい、不幸じゃなくて、はずがしいよ」

訛りが少ないなおくんのアクセントが、いつもより揺れているような抑揚があった。噴き出すように溢れ出る涙や鼻水は何度も飛び散る湖の水と混じり合っていた。

僕の心は揺らいでいた。僕はなおくんのことをきちんと理解しきれていなかったのかもしれない、そう思った。人を好きでいるというのはたとえ小学生であってもその構造は複雑なのだ。仲良くなればなるほど相手を知りたくなる。しかし本当のようちゃんを僕たちは誰も知らない。周囲から聞こえる情報だけが彼女を形成してしまう。その葛藤をなおくんはずっと抱き続けてきたのだと思うと、それはそれで苦しそうだ。溺れるように水しぶきを上げながら暴れ回るなおくんと悪玉先生が、大丈夫、大丈夫、と言いながら静かに抑え込む。

「そんなこと言っちゃいけない、みんなは幸せになるために生まれてきたんだから」

水がよくない器官に入ったのか、なおくんが泣きながら咳き込んでいた。気がつくとはかのクラスメイトも伝染するように泣いていた。突然に動き出した周囲の変化に僕は動揺してい

た。そのとき、ようちゃんが泣いていたのか笑っていたのかは思い出せない。けれど彼女は僕たちみんなに向けて言った。

「わたしのことは心配いらないよ、それよりもここにいるみんなには笑ってほしい。みんないまあの日にひっぱられてる、そんなのもつたないよ」

そのあたりから僕の記憶は曖昧で上手く思い出せない。よくわからなかった。自分の発言から動き出したはずの波が、理解の範疇を超えていた。あとになって、僕は悪玉先生からようやくんのお父さんが亡くなっていたことを知らされた。消防隊員だった彼女のお父さんは町中で警報が鳴り響くなか、水門近くの消防署から避難誘導にあたった。すぐにようちゃんを連れて高台へ逃げろとだけ彼女のお母さんに伝え、電話を切った。

「人の命なんて二の次だって、思ってたほしかった」

転校手続きのとき、彼女のお母さんはそう言って学校内で泣き崩れたのだという。

父や母が話していたことは完全なるデマだった。一家の主の喪失感に苛まれながらようやくこの町にたどり着いた家族を、僕たちは中傷していたのだ。父や母だけではないだろう。きつと当時の僕には想像もできないような数の人たちが、知らず知らずのうちにその中傷に加担していたのだと思う。噂が噂を呼び、もう原型をとどめなくなった形で。

自分の鼓動が速まってくるのを感じて、湯船から顔だけ浮かんでいるような姿勢をとっていた僕は、思わず起き上がった。上半身が空気に触れ、風呂場にもかかわらず外からの冷気で鳥肌が立っていた。水は目の前をただ揺れてみせるカーテンのようなものだ。圧倒的な力もつていながら、それは軽々しく揺らいで僕を記憶のなかへ誘い圧迫する。そして向こうに透けて見える完璧な闇を僕に見せる。

あの日も冬だったから、大きな波のなかで、ようちゃんのお父さんは息苦しさだけじゃなくて、寒さも同時に感じていたのだろうか。

町が一瞬にして流される映像をニュースで見たととき、人はこんなにも脆いものだというのに僕は恐ろしいものを感じた。だけどあの日からたくさんの人が協力して町が少しずつ元に戻っていくさまを見たときも、少しだけ動揺を覚えた。どれほどの速度で町を戻そうとしても亡くなった人間は戻ってこないのに。元の形に戻すことに一体なんの意味があるのだろうか。いや、意味はある。あるのだけれど、大勢が目指す復興が、被災者の、ようちゃんの気持ちを置き去りにしてはいないだろうか。そんな風に思うたび、僕の心は落ち着かなかった。

ようちゃんの言った通り、たしかに僕たちは地震という大きな歪みを避けて通れなくなっている。僕自身、それほど大きな被害があったわけではない。しかしこれから先、震災がなかつ

た人生を送ることは不可能なのだ。直接的じゃなくても、地震は人からなにかを奪った。その喪失感は一一人の一生に渦巻き続けている。

そして父と母の会話を聞いたあの日、僕はようちゃんからさらに奪い取ったのだ。おそらく人が一番大切にしている尊厳の根幹のような部分を。

彼女や、なおくんや、秋田の同級生たちは、いまどうしているだろう。なおくんはいまもあのまっすぐさの強度を保っているだろうか。ようちゃんはどうかだろうか。大人になった彼女が、いまでも知らない誰かの言われるがままになってる姿を想像する。その先で危うく結びついてしまいそうな最悪の光景が脳裏をよぎって、全身の産毛が逆立った。これまで何度も、現在の彼らに思いを馳せては、やはり僕は彼らに会える立場にいないことを自覚してきた。

ひょっとしたら、僕のしたことなど彼らの人生には取るに足らないことなのかもしれない。ただ僕が当時のことを考え続けること、きつとそれでしか得られない幻想がある。自分で幻想といってしまうほどに、それはまともじゃない形で僕のなかに存在している。いま彼らに会ってしまったら僕が十年抱き続けてきた後悔になにかしらの結論が下されるかもしれない。そして僕のなかだけに留めている彼らへの感情が外へ漏れ出したとき、僕は遠いどこかに消えてしまう気がするのだ。馬鹿げた話だけど、現実とはそういうものじゃないかと思う。発作や、

後悔の記憶があるだけで、僕はいままも不安定な場所に立てているのだと思える。自分自身を暗い地点へ誘うような水を見つけては安心する。

ふと気がつくとき、脱衣所のほうで携帯の着信音が鳴っていた。音は大きく、メロディーの継ぎ目に訪れる無音がやけに暴力的で、その度に鼓膜を殴られているような心地がした。湯船に浸かり、なんとなく着信音の数を数えながら、音が鳴り止むのを待っていた。ただ黙って聞いていると、やがて緊張に近い感覚が訪れた。全身が水に濡れたような、というか実際に濡れているのだけれど、内側から湯船のお湯よりも熱いものが放射されているような火照りがあった。十五回目くらいまで数えたあと、立ち上がり風呂場を出ると、貧血を起こしたときのように一瞬目が眩んだ。

携帯の画面には「陽平」と書かれていた。僕はそれを数秒見つめたあと、応答ボタンを押した。

「もしもし」

自分の声のトーンからさっきまでいた夜の公園の暗さが思い出された。

「おまえさ、生きてるなら返信しろよ！」

「ああ、わるい」

LINEを確認すると、あれから7件も彼からメッセージが届いていた。

「サボってるわけじゃないんだろ？ 本当に具合が悪いんだろ？ 去年のいまごろもそうだった、なあ、なにかあるなら言ってくれよ」

彼は本当に僕のことを心配しているようだった。ほとんど大学でしか会うことがない僕にどうしてここまでの言葉をかけられるのだろうか。陽平は名前の通り陽気な性格だが、思い返すと部分的に情の深い一面もあった。前に学校を休んで彼にラーメンを奢ったとき「なんで休んだらラーメン奢らせるかわかるか？」と話したことがあった。

「大学が嫌になってもこういう約束は守るのがおまえだから。人のことは裏切らない、だからおれがいるかぎり大学をやめることはない、休んでも必ずおれに会いにくるから」

話したあとに替え玉まで頼んでいた彼を見て、そのときの僕は適当な軽口を言って受け流した。けれど本当は僕へ向けた一つの信念のようなものが彼のなかに潜んでいたのかもしれない。

全身を軽く拭いたあと、服を着ながら「あのさ」と言うと、いま頭のなかで考えていることを陽平に話しているのを想像する。

「ずっと昔の記憶に囚われて」

「うん」

「……いまを生きてる実感がないんだ。傷つけてしまった人たちに、謝る勇氣も、前を向く強さもない……親にも迷惑かけて、友人にも心配させて」

陽平の相槌が止まる。

「ようちゃんや……なおくんやみんなに、ひどいことをした。それなのに記憶はどんどん薄れていくし、時間が経つにつれて思い出す頻度も減って……僕は……僕はこれから、どうすればいいんだろう」

想像だけで、糸が切れたように涙が溢れていた。何度拭いても、それはとめどなく流れた。声が漏れないように口を抑えると、今度は体が震え出した。

「さく、なんか言えよ」

我に返ると、早くなにか答えなくてはと思い、目を思い切り瞑りながら深く呼吸して落ち着かせる。

「なんで、思ってることって、そのまま人に言えないのかな」

彼は「まあ、お前は言わないよな」と言って笑った。僕の異変には気づいていないようだっ

た。

「だけど、気持ちのまま言葉にできる奴がいたら、そいつはきっと人で悩んだことが無い奴だよ。おれは——」

彼が話している途中で一度音声途切れて、その隙間に、ゴォーッ、という飛行機が通過する音が混じっていた。彼の言葉を聞き取ろうと携帯に耳を強く当てていると、電話の向こうとほぼ同時にこちらでも遠い空からジェット音が鳴り響いた。

思いがけず聞こえてきた二つの轟音になにかが思い出される心地がした。僕は脱衣所を出て、裸足のまま靴のかかとを潰して外へむかった。

夜空には赤く点滅した機体が飛んでいた。はるか上空をマッハのスピードで飛んでいるあの飛行機は僕の思うように飛んではくれない。猛スピードで僕の制御の外を飛び続ける。そう思うと、その音と速さには圧倒的な敗北感があった。だけど同時に僕を解放させてくれる温かみのある要素が隠れているようにも感じて、それが僕の心のどこかに触れた。どういうわけか、僕はそれを走って追いかけていた。自分がなにがしたいのかわからなかったが、走り続けた。冷たい風も気にならなかった。

靴が脱げそうになって、幼い子のようなきこちない走り方になる。すると子供の頃、日が暮れるまでわけもなくようちゃんやなおくと走り続けて遊んだ日々を思い出す。止まりかけていた涙が再び湧き出した。公園を越えたあたりで、すぐに僕の体力は底を突いた。

息を切らしながら、呆然と空を見上げて立ち尽くしていた。右の手のひらに強く握られていた携帯に耳を傾ける。

「もしもし、ごめん、いま飛行機、追いかけてた」

「え、どういうことだよ」

「それは、いいんだ、それより、今日夢を見たんだ」

息が止まりそうなほど苦しかったけれど、それでもいいと思った。

「昔秋田に住んでたんだけど、そのときの夢を見たんだ。仲の良かった、友達がいて、田沢湖っていう、青くて、透명한湖に行ったときの……」

話していると、もう忘れてしまった夢の記憶が、一色、また一色と彩度を放ちながら僕のかなかに蘇ってきた。どこからともなく、あの青い、田沢湖の水面に浮かんでいたときの映像が突如として流れ込んできた。

そうだ。あのとき、なおくんが泣き叫んだあと、ようちゃんはみんなに向けて言った。

「あれだけのことがあったんだから、わたしたちはよくしかならない、なにも失わないし、涙が出ることもない、この湖といっしょだよ、ここでは大きな波に飲まれることもない、あるのは小さくて深いきれいな水だけ、ここではなにも悪いことは起きない、もういいんだよ、わたしたちはもう、よくしかならないんだよ」

ずっと忘れていた。彼女は確かに笑顔でそう言い放ったのだ。

目の前が白くぼやけはじめていた。こうやって、日々の生活の外にある、まったくちがう角度から希望に近い光が差し込むことがあるのか。人生は、生きていくことは、ひよつとしたらこういうことなのかもしれない。決して洗い流せない過去を水なんかを見て思い出し、その度に暗いところへ行こうとするけれど、電話をかけてきた友人と同じタイミングで飛行機が通り過ぎ、その音をきっかけに思い出される過去に救われる。

おそらくあの場にいた人間のなかで一番辛い思いをしたであろうようちゃんは、誰よりも明るい未来を望んでいた。彼女は知っていたのだ。過去の記憶に引つ張られていても、なにも生まれないことを。ようちゃんのお父さんや、あのと生きられなかった人たち。そういう人の存在を知っている以上、希望を捨てて生きることが、彼らへの冒涇だということ。

「わたしでよかったら」

あれは自分を卑下した言葉じゃなかった。彼女はただ、大事にしていたのだ。これから彼女自身に関係していく世界の一つ一つを、これから見つかるかもしれない、失ったものを埋めていけるかもしれない要素を。前を向いて、ただ日々を愛しんでいたのだ。

飛行機の音はもう消えかけていた。暗い夜空にうつすらと飛行機雲が白く浮かんでいる。空気が氷みたいに冷たくて、母が言ったとおり、いよいよ雪が降りそうだった。あとでかけ直す、と言って陽平との電話を切ると、涙を上着の袖でこすり取り、僕は家に引き返した。父と母の話の聞こえ方と聞いた。彼らの葛藤を、僕がずっと逃げてきた、僕以外の人の記憶に触れようと思った。

クラス会に行けるかはやっぱりわからない。苦しい記憶も消したくはない。きっと感情が高鳴ることの立体感時間は時間と共に薄れていくだろう。傷が癒えなくても、もう悪くはない日があいつかくる。そのときもし僕が自分を少しだけ許すことができたなら、前を向いていいのだと自分に言い聞かせようと思う。だけどこれから先、新たに生まれる出来事に僕は再び立ち止まっては、それに傷つけられると思う。

生きることは失敗の連続だ。それでも続けよう。こんなどうでもいい日々でも過ごしてい

く。そして今日のような日がまた訪れてくれるのを待てばいい。失敗と失敗のあいだで揺れている光を追いかけながら。

「おかえり」

家に帰ると、母はキッチンで皿洗いをしていた。父は変わらず同じ席に座っていて、湯豆腐の数も、瓶ビールの残りも少なくなっていた。久しぶりに見た父の背中が昔より小さくなったように感じて、少し寂しかった。これから先、こういう感覚が少しずつ増えていくのだろうか。

「ただいま……聞かせてほしい、あのときのこと」

父と向かい合うように座ったとき、時々はこうやって、一緒に酒を飲もうと思った。

小説の部 ふるさと秋田文学賞佳作 受賞者のことば

距離

山本郁人

恐ろしさと甘い何かが自分の中に同居している、という感覚は誰もが生きていると何度か経験したことがあるものと思います。

私の人生の中でそれが著しく感じられたのが震災の日の夜でした。東北で生まれ育った私にとってそれはとても不思議な夜でした。同じ東北のどこかで、手を伸ばすと届きそうな場所で、凄惨な現実が確かに存在しているのだという認識はありながら、当時小学生だった私にとってその距離はあまりに遠く、恐ろしさを量れないことが最も恐ろしいことでした。停電が続く夜、蝋燭の火を囲むように、いつもより近く



で家族の体温が感じられました。寒い夜にその熱が逃げないように互いを想い合う、こんな柔らかな現在というものがここにあるのに、なぜどこかでは悲しさに暮れて生きている人が同時に存在しているのか、つまり私から見た震災へのイメージは、その距離から来るものが大半を占めています。

災害と人の距離、人と人の距離、というのは千差万別で、その距離を変えることは基本的に不可能ではないか、というところからこの物語の構想は始まっています。

震災を題材にしたからには、どんな形であれ、その作品は誰かに読んでもらわなくてはいけないという責任が書き手には生じると私は考えます。だからこそ書きながら逃げ道を探し、時にはそこへ向かってしまう瞬間が何度もありました。そのため、改めて読み返すとこの物語には筋書きから逸脱したある種の破綻を感じる箇所が散在しています。それでも不恰好ながらこの小説が辿り着いた一瞬は、私自身どこか心が軽くなる心地がありました。

改めまして、拙作を読んでくださった全ての方に感謝いたします。そして読んでいただける機会を与えてくださった選考委員の先生方はじめ、関係者の皆様にもお礼申し上げます。



第9回ふるさと秋田文学賞 小説の部

ふるさと秋田文学賞佳作

千束立つ日陰の月花

山本愛海・作

千束立つ日陰の月花

たとえ月の光に首を落とされても、私たちは生きなくてはならない。

ビル林は熱で倦む。晩夏と言えどこの暑さでは、とてもではないが月涼しとはいかない。おまけに都会の夜空は聳え立つビルに苛まれており、肝心の月が見えないのでは、涼の取りようもなかった。

智子が足早に歩いているのは、右手に提げたエコバッグにコンビニエンスストアで買ったアイスクリームがこの暑さで溶けてしまわないかが気になるからだ。ビジネスシューズのヒールをアスファルトに打ち付ける音が苛立たしげなのは、暑さのためではなかった。

「阿部さんはいつもしっかり化粧をしているよね」

言ったのは五十絡みの職場の男だ。この春から智子と同部署に配属となった、隙の無い食えない上司である。『隙が無い』というのは、最も上司に持つておいてほしくない性質だ、と智子は考える。朗らかな表情の割には、いつもどこことなく不機嫌なので、智子はこの男のことを少なからず苦手に思っていた。

このときも、男は朗らかな口調で装ってはいたが、口の端にわずかな冷笑が滲んでいたのを智子は見逃さなかった。否、智子が見逃さなかったのではない。男は故意に冷笑を滲ませた

のだ。智子が『厚化粧』である、という含みを持たせるための仕草を、角が立たないようにや  
つてのける。智子は自分を賢い女だとは思っていない。被害妄想ではないという確信はあつた  
が、こうした捌手にはめつきり弱かつた。

智子は、人の化粧に口を出すなんて、品のない、失礼な男だ、と食って掛かりたかつたが、  
自分の怒りを表すのにマナーを盾に取るのは、いかにも年増の女がしそうなことなのではない  
かと思ひ至つて口を噤み、当たり障りのない誤魔化し笑いをした。今になってみれば、もつと  
上手い躲し方も反撃の仕方もあるのだが——その場で上手く立ち回れず、後になってああ  
すれば良かった、こうすれば良かった、と思うのは常のことだつたし、このことについて考え  
すぎるのは『不器用な自分が悪いのだ』という自己嫌惡的な結論を招きかねないので、どうす  
べきだつたかを顧みるのはやめることにしている。

智子は三十を越えてから、こういう思考停止が増えたことを自覚していた。反対に、上司に  
「セクハラだ」などと捲し立てる愚かで小気味良い勇氣は失われていつていることも。若けれ  
ば若さを理由に相手にされないが、年を取つたら年増の女のヒステリックだと処理される。惨  
めさは変わらないかもしれないが、悲壯感があるのは後者だと、智子は思う。

そもそも、厚化粧だというものも一概に否定できることではなかつた。オフィスメイクである

から、無難でシンプルに仕上げているが、恐らく、件の発言をした男の想像する五倍は手間をかけている。なにせ、ベースメイクで肌を仕立てるだけのことに、六つは化粧品を使用しているのだ。

化粧下地は質感の異なる二種類のを合わせて使い、その上にファンデーション、フェイспパウダー、シェーディングとハイライターを重ね、さらにチークまで入れるならば七つになる。アイシャドウに至ってはそれだけで五色を超えてしまう。眉は髪色に合わせて眉マスカラで色を調整し、ペンシルで整え、パウダーで描いているので三種類だ。風呂上がりのスキンケア用品に至ってはもう、数えたくもない。

そんな有様だったから、正真正銘、厚化粧で間違いはない。しかし、諦観を覚えるのは癪だった。

ガツ、とアスファルトの凹凸が靴底を削る、ざらついた感覚が踵に響く。———こういふときに、故郷の歌が脳裡に過るのはもはや癖と言っている。

『おぼこナア、なんぼになる。この年暮らせば十と七つ』

智子は今日、三十四になる。歌に歌われる十七歳の乙女の、倍の年月を生きただ。

智子がリビングの扉を開けると同時に、唯花がシーリングライトの色を変えたのがわかった。唯花は明るい白色照明を好むが、智子が頻繁に頭痛を起こすので、共用の部屋の照明にはケルビン数の高いものと、一段暗い暖色の二種類を切り替えられるものを使っている。

智子はリビングを通り過ぎ、キッチンへ向かうと冷凍庫にアイスクリームをしまった。調理台には唯花が駄ビルの地下で買ったであろう、きらきらしい惣菜のパックが所狭しと並んでいる。唯花は食に金を使うタイプの女である。智子より八つ若いので、惣菜のラインナップも胃の強さの分、若い。レタスの敷かれた——おそらくレタスではないが、智子の目にはお洒落な葉っぱにしかみえない——エビマヨがかてかてか光っている。これが誕生日パーティーの御馳走と言うわけだろう。

唯花がおかえり、と言いながら、犬のようにキッチンについてきた。ソファに横になっていたのだから、髪がへたっている。へたっているも毛先が跳ねているので、唯花の癖毛は尋常でない。

短い前髪が眉毛の上で上向きになっているし、サイズの合わないTシャツに、下はショート一枚というだらしない格好のわりに、唯花は夕餉の支度のため、極めてきばきと動く。食器棚から皿を出し、レンジで温め直す必要のあるものからパックを解いていく。台所に立つと、

唯花の小柄なのが目立った。

「お風呂洗ってくる。もう湧かしてもいい？」

「うん。今日は一緒に入ろう」

唯花の誘いに、わかった、と頷いて、バスルームに向かう。途中、ブラウスとスカートを脱いで洗濯ネットに入れ、ランドリーバスケットに放り込んだ。この物件は、風呂トイレはかろうじて別だが、バスルームの洗い場と洗面所が一体になっているので脱衣所がないし、洗濯機は廊下に置かれているので狭苦しい。今時分であれば構わないが、冬場の寒さは地獄だった。智子がストッキングを脱ぐと、ふとした身じろぎに起こる微風でさえ冷たく感じた。随分汗をかいていたらしい。

智子はバスルームをざっと洗うと、ついめにシャワーを浴びて汗を流し、化粧も落とした。ようやく肌が息をし始める。食事の後にもう一度風呂に入るので、保湿は軽くしておく。

たつぷりと御馳走をいただいたあと、入浴のためにもう一度服を脱げば、食べた分だけ、お腹が見事にぼっこりと膨らんでいたもので、二人して笑ってしまった。

ぬるいお湯の中で智子の足と唯花の足とが触れ合うと、ふたりの女の肌の違いがよくわか

る。

智子は浴槽の縁に頬を預けながら、頭に思い浮かぶままに歌を唄った。

「咲けばナア、実もやなる。咲かねば日陰の色もみじ」

喉にも腹にも力が入っていないので、へろへろと頼りのない声が出る。唯花がふ、と鼻に抜けるような微笑をこぼしたのが聞こえた。伏せた睫毛が湿気を吸って、いつもより幾分か重そうだ。唯花は美人ではないが、さっぱりとした賢そうな顔をしている。実際、唯花は頭も記憶力もいいので、智子の頭で思いつく程度の質問は、問えば大抵のことには答えが返って来る。

「色もみじってなんだろう」

わからないことを調べるより先に訊いてしまうのは、智子の悪癖だった。唯花は、ン、と小さく返事をしただけで、答えたくなさそうに鼻先の雫を拭う。

「花なのに、どうして紅葉なのかな」

追って問えば、逃げ切れなくなった唯花はぼつの悪そうな顔をした。

「紅葉じゃなくて、色も見じ、じゃないの」

適当だけど、と、唯花はややぶつきらぼうに付け足した。

「ああ、なるほど」

智子は唯花の苦い顔の意図を察して頷いた。だとしたら嫌な歌だ、と思ったが口には出さなかった。

自分でも意外に思ったが、そのとき口を閉ざしたのは、おそらく単純に郷土愛のためだった。土地のものを嫌だと思いたくない。この歌が歌われる故郷を離れて長いが、智子は自分のことを土地の人間だと思っている。都会に染まっても、都会の女にはなり切れなかった。それは、生まれを尋ねられたとき、

「秋田に美人が多いって本当？」

とか、

「なんか東北弁喋ってみてよ」

とか、くだらない揶揄をされることが理由ではない。もつと根本的に、智子は都会に馴染めなかった。——けれど実家とは、もう長らく連絡を取っていない。

ざぶ、と立ち上がると、素肌の上を勢い良くお湯が滑り落ちて身軽になる。水面が激しく波立って、唯花の髪を濡らした。洗い場に立つと、唯花も後を追って浴槽を出る。湯に浸かっていた部分の肌だけが見事に赤く色づいていた。

「智ちゃんの肌、水を弾いて楊貴妃みたい」

ひた、と女の柔い指が背中に触れた。学の無い智子にはわからないが、そういう詩があるのだそうだ。『温泉水滑洗凝脂』。温泉水滑らかにして凝脂を洗う。凝った脂のように水の滑る白い肌。

唯花はその表現を気に入って度々口にするが、どう考えたって楊貴妃という柄ではない。それに、年を経て智子の肌は張りを失い、少しずつではあるが重力に負けつつある。懸命に抗ってはいるものの、水を弾く玉の肌はいつまでも維持できない。

トリートメントが髪に浸透するのを待っている間、唯花は智子の背中の無駄毛を剃ってくれた。唯花は何かと智子の世話を気まぐれに焼く。ドライヤーで髪の毛を乾かすのとか、爪を磨くのとかが、思い出したかのようにやりたがる。

唯花の手つきは丁寧で気持ちがいいし、生来器用なたちらしいので、智子は大抵申し出を受け入れて楽をしているのだが、中には突拍子のないものもあり、そういうものははっきりと断っている。歯を磨かせて欲しい、くらは可愛いものだったが、下の毛を剃らせて欲しいと言われた時には驚いた。絶対に御免だったので、代わりに自分では手の届かない背中の毛を剃ってもらうことになったのだ。

どんなカップルも他人に言えない戯れは持っているとは言うが、智子にとって、それはあま

り普通ではない。唯花に他意のないのがわかるから許している行為だ。犬や猫に丁寧なブラッシングを施して喜んでいるのと変わりが無い。

泡立ったボディソープが丁寧に背中の上で塗り広げられる。貝殻骨の内側に剃刀を当て、背骨に沿ってすつと引かれる。それを数度繰り返して、剃刀の刀身分横にずらし、また同じ動作をする。水に混じったボディソープが剃り落とされて、だらだらと腰のあたりを伝う感触が生ぬるい。

剃刀負けを起さないように、その作業は極めてゆっくりと行われた。おしまい、という宣言のあと、シャワーを背中に当てられ、流れ落ちた泡がタイルの上を滑って排水溝に落ちてゆく。

唯花が濡れた頬を背中にくつつける。肩甲骨と肩甲骨の間のくぼみに、唯花の頭蓋がぴたりと収まる。湯気の匂いとボディソープのミルクっぽい匂いに混じって、唯花の体臭が香った。川の水の匂い。夏の日陰の匂い。およそ体臭とは思われないが、洗剤の匂いではないし、唯花は化粧品類をほとんど使わないので、体臭としか言いようがない。悪い匂いではないが、湿気っていて、良い匂いとも言い難い。だが、智子はこの水の匂いが好きだった。

幼かった智子のする一番の遊びは水浴びだった。家の前の道を南に下っていくと小川に突き当たり、土手を滑っていけば河原に下りられるようになっていた。横幅も深さも、そう大したものではないが、智子が潜ったり泳いだりするには十分だった。

そこで泳ぐ子どもはほとんど智子しかいなかったように思う。水が冷たすぎたのだろう。祖母はその小川の水は雪解け水だと言っていた。確かに、夏場でも冷たく感じるその水は、晩春の頃であれば凍える程だった。それでも智子は梅雨が明ければ、毎日のようにその小川へ通い、秋の近くなる折まで水と戯れ続けた。

本当に雪解け水であるかは知らないが、疑問の余地がないほど水は新しく、綺麗だった。べったりと照り付けていた太陽も、水の中ではきらきらと砕け散っている。智子は本当に、水流の間を縫うように泳いだり、毬みたいに体を丸めてぶかぶか浮いたり沈んだり、水底のふわふわした目の細かい土を手のひらでなでてみたり、それだけのことで何時間でも遊んでいられたのだ。

川底の石はもやもやと栄養のありそうな藻をつけていて、その上をたくさんの川魚がすいすい泳いでいった。水中で智子がよく目にする魚は大体三種類で、そのすべての名前を智子は知らない。

よく群れになってゐる小魚と、きらきらしたいかにも魚っぽい魚と、お腹にオレンジがかつたピンクのラインが入った魚（ニジマスだったのだろうか？ 智子は身体に赤い線が入っている魚は、ニジマスしか知らない）の三種類だ。

一番身体が大きく、太くて肉の詰まっていそうなのはお腹にピンクのラインが入った魚で、泳ぎ方さえたくましかった。だから智子は、度々その魚を素手で捕まえようとしたが、追いつけたことは終ぞなかつた。

父は、しばしば川から帰って髪をびしょびしょに濡らした智子に、岩魚はいたか、と機嫌よさそうに問うた。それに、いたと返事をしたことは一度もない。もしかすると見かけたこともあつたのかもわからないが、岩魚は凶暴であり、獲物を丸呑みにし、時には共食いをすることもあつたと聞いて、幼い智子は大きな怪魚を想像していたのだ。

川から上がるとき、地面に足をつけると、いつも波打ち際を踏んだみたいな音がした。

学校指定の水着も髪もびしょびしょのまま、帰路を辿る。家では祖母が待っていて、水分と塩分の補給のために、お茶と漬物を用意してくれていた。茄子を丸ごとぬか床に漬けた、歯ごたえのぐにゅつとするやつで、智子ははじめそれが嫌いだつた。

それは智子の姉も同じで、偏食の激しい姉は口をつけようともせず、居た堪れなくなつた智

子はそれが好物であるというふりをした。けれど、「しつたげうめえ」と言っているうちに、それが本当になってしまった。祖母の漬物は智子の好物に数えられ、夏の間はこうしておやつとしてそれを食べるのが慣例となっていた。

智子は、中学に入学してから、ある日を境にぱったりと小川へ行くのを止めてしまった。理由は覚えていない。

都会に暮らし、実家との連絡が途絶えても、智子に故郷を捨てたという気持ちはなかった。——職を変えるとき、唯花に誘われ同棲をはじめ、住所も変わった。二年契約のスマートフォンを新しい機種に変えるとき、思い付きで携帯番号を変えた。強い意志があったわけではないが、結果的に実家との連絡を絶つことになってしまった。

智子はこれら一連の行動に、極めて控えめな故郷への殺意があったことを、否定はしきれないでいる。土地を懐かしみ、家族を愛したその裏で、自らが一切を疎んでいたという可能性を捨ててきていない。

だったとしても——智子は秋田で育った。心は少女のころから何一つ変わっていなかった。

雪のゆるんで出来た水の中で陽の光の破片に手を伸ばしたように、今は水の匂いのする肌を求めていただけだという気がした。

家族は皆、智子が女と寝る女であることを知らない。想像すらしていないだろう。そして智子も両親が唯花の存在を知ったとき、どんな目をして、どんな言葉を口にするのか、想像できなかった。ただ、少なからずそこに断絶が横たわるであろうことは、確信めいた予感がある。智子はその時が来ても、両親も自分のことも、蒙昧だとは思うまいと決めていた。しかし、その時は来るまい。智子がこうして思考停止をしている限り、故郷に帰れる日はきつと来ない。

罪悪感がある。だから智子は金を貯めていた。両親の為の金である。姉は奔放なたちなので、両親に対して十分な金銭的援助を行っているかは怪しかった。したがって、次女の智子がしっかりしなければならぬ。預金通帳に記載された数字は少くない額を示しているが、この金を渡すことができるのはいつになるだろう。両親が亡くなつては元も子もなくなつてしまふ。

罪悪感を埋めるための金が、また罪悪感の元手になる。智子には、この罪悪感によって、己の良心の存在を確かめ、甘い安心を得ている自覚があった。そしてさらに甘い安心を得る自分の卑しさを自覚し、また罪悪感を得る。どんどん自家中毒になる。いつそさっぱりと殺意を振

りがざせたのなら、その方が誠実であろうという気もした。

誠実さ。

智子は健気な子どもだった。今でも誠実でありたいと思っている。けれど、誠実であろうとすればするほど、その実態は雲をつかむように覚束なくなる。誠実について考えることは、いつだって智子を途方に暮れさせてきた。

例えば、こんなことがあった。

あの震災の日から数年、ひっきりなしにニュースに取り上げられることは無くなったけれど、世間は度々その生々しい傷跡を舐めていた。

智子は職場の中年の女と昼食を共にしていた。その日が三月十一日だったから、女はテレビ番組と同じようにそのことについて触れた。

「大変だったでしょう」

と、ひどく気遣わしげな声音で女は言ったが、智子はちっとも大変ではなかった。智子はあの日、やっぱり故郷にはいなくて、棚の下敷きになったり、家が無くなったり、津波に襲われたり、避難生活を強いられたりしてはいなかった。親族も亡くなっていない。

智子はあの日、テレビに映る天災を眺め、血眼になつて情報をかき集めようとし、何もできず結局またテレビを眺める、そのくらいのもありふれたことしかできなかった。

——恐ろしい思いはしたが、智子は被災者ではない。だから、女の言葉には曖昧に頷いた。触れられたくないというより、触れられても話すべきことなどないように思われたのだ。

女はおどおどと口を開いた。

「実は、家族旅行に行ったの」

女の義父は秋田の生まれで、出稼ぎでこの街に来たのだという。夫方の親族の大半は向こうであるから、これを期に会いに行きたいのだと、女は説明した。観光業をはじめとした地域の事業にお金を払う心づもりでもある、と言いつがましく付け加える。

智子は女の考えに概ね同意した。あの災害をきっかけに、『会いたい人には会えるうちにあっておかなければならない』という強迫観念じみた不安を感じたのは自分も同じだったからだ。

いい旅行だった、と女は言った。

「義父のお姉さん、初めて会ったの。さすがに腰は曲がってきているけど、御歳のわりに元気そうだった。それから、やっぱり秋田の人は美人ね」

と言った後に、

「手作りの漬物が美味しかった」

と言った。智子はそれで、俄然女の話聞く気になった。女は他にも、

「行きがけに盛岡でわんこそばを食べた。でも、夫より私の方が良く食べたわ」

とか、

「やっぱり地方は水が綺麗ね」

とか言った。そうして話しているうちに、ふと顔を曇らせてぽつりと口を開いた。

「でも、私迷ったの」

世間話の延長のような何気なさを纏ってはいしたが、胸のつかえを打ち明けるような響きは隠せていなかった。世間には不謹慎と自粛のムードが漂っていたから、旅行をためらうのは必然だろう、と智子は思ったが、女の迷いはそうではなかった。

「子どもたちに被災地を見せるべきかどうか、迷ったの」

俄かに、智子は鋭い嫌悪感を覚えた。心の柔いところに急にずかずかと踏み入られた気持ちになった。

女には中学生になる子どもと、十になるかならないかくらいの歳の子がいた。詳しく聞いた

ことは無いが、ふたりとも男の子だということと、名前に同じ漢字が入っていることは知っている。

女は子どもたちに、知っていて欲しいのだ、と言ったが、今度は同意できなかった。智子はこの災害に関して、具体的かつ即物的な支援を行い、実用的な善意による沈黙を守るべきだと思っていたからだ。それが誠実さだと信じている。

女は『教育』の為に被災地を『使おう』としている。その傷跡の生々しさを、子どもの目のために消費している。智子にはそんなふうに思われた。智子は、ふつふつと怒りが腹から喉元に迫り上げてくるのを感じていたが、上手く言葉が見つからず、ぐるぐると考え込んで唇を引き結んでいた。

「結局、やめることにしたのだけど。松島のあたりを通りがかったとき、たくさん瓦礫を見たわ」

女は常より少し早口だった。

「かもめが飛んでいて、子どもが持っているスナック菓子を取って行った」

しばらく沈黙の時間があった。女は少し俯いて、遠い目をしていた。智子は自分の怒りが徐々に収まっていくのを感じた。女の口ぶりが、その目が、ちっとも大義名分や偽善に酔った

感じではなかったからだ。正気の日だと思われた。

それで、智子はわからなくなってしまうた。本当の誠実さに尽くすのならば、どうすべきか。正しい考えや、行動が。先ほど不誠実だと思った女の言動も、一種の誠実さなのかもしれない。なかった。

長い間のあとに、女はやっと口を開いて、

「いい旅行だった」

と旅の総評を改めてまとめ、

「かもめは貪欲で、すごく生き汚かった」

と添えて、話を締めくくった。

女が始終どこか申し訳なさそうに話していたのが、なんだか不思議だった。このひとはいったいなんのつもりでこんなことを言うのだろう、と智子は思った。

誠実さ。

唯花の今年の智子への誕生日プレゼントは、例年と同じく口紅だった。シャネルの暗いピンクのルージュは伸びが良く、唇の上にのせると貝殻の裏のような光沢を放つ。綺麗だった。

唯花は化粧に詳しくないが、デパコスのリップはいくら持っていても構わないと智子が言うので、誕生日プレゼントはかなりの高確率でリップになる。おかげで智子はシャネルもマックもイヴサンローランも、かなりの色数を所有している。

「ありがたい。嬉しい」

新品のステイックを練り出しながら、智子はなるべく落ち着いた女に見られたいという欲望から、喜色を声にのせて言った。もしかしたら、少し社交辞令的な響きを帯びてしまったかもしれない。唯花は満足そうに鼻を鳴らしている。小さな黒いシヨップバッグを丁寧に畳んでいる智子を見て、目だけで笑った。

「嘘つき」

笑声混じりの揶揄だったが、智子はひどく動揺した。嘘つき、と言われたときに嘘についていなくても、ドキッとしてしまうのは何故なのだろう。

「本当に嬉しいたら」

口角を威嚇の形に引き上げながら、智子はむきになって言い返した。嘘ではなかった。リップならば、色も質感も一本一本違うので、本当に何本あっても困らない。

それに、昨今ではマスクが欠かせないので、万が一いまいちに思われる色や、思ったように

肌に合わないものを送られたとしても、ある程度の潰しが効く。それに、高級なリップをつけることは自分を一段高いところに演出してくれるように思われて、智子は好きだった。どんなに上司が傲慢な態度で嫌味を言ったとしても、「この人がどれだけ偉いのかは知らないが、少なくともこのシャネルの方が偉いだろう」という余裕に心の整理が付く。

平然としていられる、というのは、ビジネスにおいて言えば、良い能力に違いなかった。確かに恋人からもらう誕生日プレゼントが毎年同じものだというのは、味気なく思われるかもしれないが、智子に不満はない。

唯花は自分から言い出したわりには智子の反応に然したる興味も示さず、アイスクリームを舌の上で溶かしている。智子も唯花も生クリームを好まないのに、アイスクリームは誕生日ケーキの代わりだった。（唯花は和菓子が好きなので、唯花の誕生日には練り切りを買う。）いつもは概ね半分の量を食べたなら、交換する手筈になっていたが、今日は誕生日なので特別に、もうワンセット同じフレーバーが冷凍庫にある。明日の晩に、今日とは違うフレーバーを食べればいい。半分こ、と言いながら、越境して半分以上のアイスクリームを食べることが、お互いにあるので、明日になれば今唯花が食べているそれと同じものが丸のままワンカップ食べられると思うと、普段はしない贅沢に心が躍る。アイスクリームは唇が冷たくなるのが気持ちよ

くて好きだ。

智子と唯花はアイスクリームを食べる傍らで、乳酸菌飲料を飲んでいた。最近、唯花は眠りが浅い。それは智子も同じで、寝付くのに薬の力を頼らなければならないほどだ。つつい、ベッドの中で人生を逆算してしまふ癖がある。天井は白く、ざらざらとしたかすかな凹凸のある壁紙が貼り付けられている。カーテンとカーテンレールの隙間から月が照らす所為で、その凹凸の陰影が深くなる。それを眺めていると、いろんなことが頭に浮かんで、また沈んで、を繰り返して眠れなくなるのだ。生涯収入、保険料と医療費と健康診断の結果。苦手な上司と二人の息子がいる中年女。結婚と歳の差。男の人の指。食費と公共料金の支払い。年々上がっていく基礎化粧品にかけるコスト。確定申告。唯花の水の匂いがする肌。家賃。年金。車の値段。奔放で自由な、頼りにならない姉。——それから両親の年齢。

自分の分が終わったら、智子は唯花の分までそれをする。唯花の人生の逆算なんてしたくないが、脳が勝手にそれをする。

こういう思考の過ちを、はじめは市販薬で誤魔化す夜も多かったが、利きが悪いので結局病院で処方された薬を使っている。それでも眠れないときはあつて、だから二人は「睡眠を整えるためには腸内環境を整えることが重要」という文言を真に受け、こうして寝る前に決まっ

乳酸菌飲料を飲んでゐる。効果はあるような気もするが、もしかしたらプラシーボ効果かもしれない。しいて言うならば、糖質が高いところだけが難点だった。

二人はその乳酸菌飲料片手に、思う存分、話した。酒場でみっともなくぬるくなったカクテルを片手に、夜が更けるまで話し込んだこともあったが、深酒をしたそのときと同じくらい、二人は奇妙に明るく、はしゃいでいた。酔っ払ってもいけないのに。智子は唯花と過ごすことで弱ちちくなっていく己を自覚した。それを怖いと思うときもあるが、たいていの場合、智子はそれをとても嬉しく思っている。

話の中で、智子は今日会社であつた不愉快な出来事についても話した。語気が荒く、それについて、あのね、とか、それでさ、とか、まだるっこしく話すので、我ながらどこか子どもじみた訴えだった。唯花はテーブルに頬杖をつきながら、そのいちいちに相槌を返してくれていた。唯花の瞳も、やはり酔っ払っているかのように熱っぽく、おぼろげだった。

事の顛末を黙って聞き終えた唯花は、満を持して言った。

「忘れなよ」

一重の脛が薄い笑みを形作る。それが魂を奪われそうなほど魅力的な笑みだったので、智子はうん、と頷いて、一切を忘れた。

唯花の身体が傾いで、智子の肩にもたれ込んだ。唯花はそのまま鼻先を智子の鎖骨の上あたりに落とし、すん、と鼻を鳴らす。智子の肌の匂いを嗅いでいるのだろう。唯花が手ずから塗ったボディークリームのグレープフルーツの匂いだ。あまり好みの香りではないが、唯花がフルーツのにおいがするのが良い、と言ったので使っている。果物のおいがする肌は、瑞々しく、しっとりとしておいしそうなのだそう。そう言われれば満更でもなく、誇らしく思わないでもないが、智子自身は肌馴染みの悪い匂いにちっとも慣れず、未だに鼻に皺を寄せてしまうことも少なくない。品質も際立って良いものとは言えないが、唯花の手入れしてくれる背中の出来物が減っているような気もするので、それなりの効果はあるのだろうと、智子は見ている。

「私、智ちゃんのために、百本でも千本でも口紅をあげるよ。赤でもピンクでも、オレンジでも紫でもブラウンでも。何色でも揃えてあげる」

唯花の頬は上気していた。やっぱり今日の自分たちは酔っ払いじみている、と智子は思った。

「智ちゃんのためだったらいくつでも買うよ。『千束にたらで あふよしもがな』って言うし。来年もその先もずうっとあげるよ。また来年、楽しみにしててね」

あまりににこにここと、満面の笑みで唯花が言うので、智子はそれが可愛くって嘖き出した。ひとしきり笑ったあとで、その和歌はなんの歌なの、と尋ねるのも忘れない。唯花はにこにことしたまま、

「男と結婚しなくて済んだ女の子の話」

と鋭く言ったので、智子はまた笑った。唯花の男嫌いは筋金入りだ。稀に勘違いされるが、智子は女と肌を重ねても、男性が苦手なわけではなかった。好ましく思う男性もいれば、苦手に思う男性もいる。智子にとってはそれだけなのだが、唯花は男性全体を、誰ひとり例外なく憎んでいる。頭のいい唯花にしては珍しい思考停止だった。好ましく思う女の子のそういった隙は、隙そのものが愛おしく思われるものなので、智子は唯花のその憎しみを放置している。自分にとっては都合のいい思考停止でもある。

智子はおたれてきた唯花の身体を片腕で囲みながら、

「それで、そのお話はどんな話？」

と、さらに問いかけてやる。唯花は語り出す。狭布の細布を織る美しい娘に懸想した若い男が、妻問いのために錦木を幾日も幾日もその娘の家へ立てかけた。娘も男を好ましく思っていたが、父親の強い反対にあって――。ざっくりとしたあらすじでさえ、ロミオとジュリエット

めいた悲恋の話だ。間違っても『男と結婚しなくて済んだ女の子の話』ではない。それを指摘してやれば、唯花は非難がましく声を落とす。

「細布を織る女の子は、生理の来ていない十二、三歳の子なの。清浄じゃなくちゃいけないから」

なるほど、確かに現代からしてみれば若いというよりは幼いと言った方がいい年齢だ。それでは昇ったばかりの月も恥じ入り、開いたばかりの花も閉じんばかりの清らかさだったことだろう。当時の適齢期がいくつなのか、智子にはわからないが、男と結婚するにしても、恋に破れて命を絶つにしても、あまりに若い身空だろう。もしかしたら、歳の数え方も違うのかもしれない。

そこまで考えて、ふと智子の思考の裡に、鋭く亀裂が入った。——生理。清冽な小川の水が流れ込む。俄かに思い出す。溼に揺れる赤。そうだった。智子が川に入らなくなったのは、初潮が訪れたからだった。

市販薬では眠れないふたりにとって、今日という日は未だ息絶えず、宵は、午前二時に生まれ変われないまま二十六時を回った。青い昏さが部屋を満たして、ベッドで身を寄せ合う智子

たちの身体を、絡めた足から根腐れさせる。

夜のしじまは夏であっても肌に寒い。冷房をつけっ放しにしていたからなおさらだった。暗がりの中で小さくクーラーの稼働音がする。横たわったまま、腕を伸ばしてリモコンを手にする。いつもより冷房の温度が二度低く設定されていた。今日は昼間暑かったから、唯花がそうしたのかも知れない。

闇の中で見える唯花の肌もどことなく青ざめている。二人で包まるには幅の狭い毛布を薄い肩にかけ直してやると、夢とうつつとをぼんやりと彷徨う瞳が智子をとらえ、目尻が甘くゆるんだ。眠れないね、と、微笑みを象った唇が音もなく、形だけで囁きかけた。ふと、そのまま雨音のように降りて来た唇が重ねられる。

単純な、とりとめもない些細な弄いではある。花びらのすぼんだような唇だ。わずかに吸えば、甘さは蜜というより茹だった花の腥さ。命の燃える匂い——朽ちていく臭気だ、女は月並みにも花に似る。

十七ナア おぼこなど

何しに花コなど 咲かねどナア

咲けばナア 実もやなる

咲かねば 日陰の色もみじ

おもふとてえぞたてそめぬ錦木を 千つか待つべきよはひならねば

季節を悟り、寸分違わず咲く花のように、少女たちは一斉に美しく育った。水の中を魚と泳いでいた少女も女になった。日陰に種を蒔いた花は、咲くだけ咲いても、実を結ぶことは無い。智子は愛する人との間に子どもを授かることは出来ない。

——育ってしまえば、あとは枯れゆくばかりの命ではある。唯花はまだ若い、智子は年を経たのだ。今時、老いを嘆くのに三十代は若すぎるのかもしれないが、それでも確かに肌は徐々に萎え、瞳は十代の頃のような潤いを失った。智子は唯花の唇を喰む、智子が嫌いだと言ったせいで、唯花の口紅は三行半を押し付けられて久しい。しかし彼女から鮮やかな紅を奪い、失わせてゆく行いを、老いゆく女の焦燥と片付けるには無粋だろう。嫉妬ではなかった。むしろ、唯花に対する賛美と言つてよかつた。

唇を離れた唯花は、満足げに頬を綻ばせる。カーテンの隙間から、刃のように冴え渡った月光が生白い唯花の首に落ちてゐる。羞月閉花とはいかず、月下美人ともいえない私たちは、朽

千束立つ日陰の月花

ちながら生きる女である。

小説の部 ふるさと秋田文学賞佳作 受賞者のことば

土地と血

私と秋田を繋いでいるのは、祖父の生まれです。祖父は若いころに静岡に移住したので、実際に秋田で暮らしていた時間はそう長くはないのですが、彼が秋田について語るとき、その口ぶりは確かに土地の人のものになります。移住から数十年経った今でも、祖父には「自分は秋田の人間なのだ」という自認があるのでしょうか。

祖父の語る秋田は面白おかしく、それでいていつも美しいです。静岡には雪がほとんど降らないので、「雪玉を坂に転がして大きくする」なんていう、きつと雪国ではありふれた遊びでさえ、幼い私には羨ましかったです。山にも家にもたくさん動物がい



山本 愛海

たこと、お葬式の仕方が静岡とは異なること、話す祖父は饒舌で、そしてなぜだか嬉しそうでした。

私をはじめて秋田の地を踏んだのは中学生の時で、東日本大震災の後でした。秋田に暮らす親族と会うための旅行です。温暖な静岡とは生える植物も違うのでしよう、車の窓から何気なく見る林でさえ異質に見えました。自分の想像する秋田とは異なっていました。それもそのはず、祖父が暮らしていた秋田は数十年前のもので、私は秋田に対して漠然と桃源郷めいたイメージを抱いていたのです。私は大伯母の家を訪れ、そこで漬物をいただきました。見知らぬ土地に、私と血の繋がっている人たちがいるのを不思議に思ったことを覚えています。実際に目にした秋田は、想像どおりに緑豊かな美しい土地でしたが、想像以上に、人間のおいというか、生々しさを孕んでいました。

今回の小説では、自分の心の中だけにある美しいふるさとと、そこで人間が暮らすことの生々しさを、故郷を離れた人間の視点から書くように思いました。私の書いた秋田を、他ならぬ秋田で暮らす方々に受け入れていただけたのなら、こんなに嬉しいことはありません。最後になりませんが、このような素晴らしい経験を与えて下さった、秋田に関わる方々に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。



第9回ふるさと秋田文学賞 エッセイ・紀行文の部

ふるさと秋田文学賞

該当作なし

第9回ふるさと秋田文学賞 エッセイ・紀行文の部

ふるさと秋田文学賞佳作

## 方程式のない斑紋

石山敦子・著

方程式のない斑紋

めらめらと燃える焰の中で直方体の塊はじつとその時を待つ。

たつぷりと積まれた黒くて堅い備長炭がひとたび火を纏うと、パチパチと少し暴れながら炉の中に送られた風の力を借りてゴォーゴォーと燃え上がる。やがて、地下から吹き上げられたマグマのようなオレンジ色を成し、自らの使命を果たさんと一所懸命に炉の温度を上げていく。

瞬きもせずに見つめていると頬がちりちりと熱くなるが、透き通るかに見える火焰の中に、刹那、吸い込まれていく錯覚を起こす。焰が競い合って熱と光を発している光景は迫力があって、しかも見惚れるほど美しい。柰目銅もくめがねの地金作りでいちばん緊張する時間帯だが、毎年この色と熱さに心が震える。

五辺を鋼鉄に囲まれた直方体の蓋のない上辺に注目する。ささやくように小さな火花が飛び散るのが合図で、それからシユワシユワーと融点の低い銀が下から湧き上がってくる。

「今だ！」

光源のオレンジ色をかき分けて燃え盛る熾火おきびから直方体を取り出す。引き上げてもお、その塊はマグマ色に燃えている。木切れを近づけるとポオツと火が付く。それからしばらく素手で触れるようになるまで冷ましておく。

杵目銅は今から四〇〇年前、江戸時代初期に秋田で独自に創作された金属素材である。その技法は秋田藩の鑄師・出羽秋田正阿弥伝兵衛が刀の鑄や小柄などの刀装具に発展させたが、廃刀令以後その技法を踏襲する者がなく、長い間途絶えたままになっていた。

その後、秋田市の鍛金家が復元を試みたが、制作過程の複雑さと口述の曖昧さに加え、彫金と鍛金と両方の技術が必要なことから近年までなかなか正確な伝承や研究が進まなかった。二〇年ほど前、ようやく秋田の作家三人がこの技法に挑み、現代に甦らせた。

杵目銅は異なる金属の板金を何枚も積み重ね、焰の上がる炉の中で金属同士が融着するまで加熱する。それから圧力を掛けて平らに延ばしてからその表面を削ると層になった斑紋が現れる。その模様が木材の年輪に見えることから「木目」とか「杵目」と表記される。

私が師事する千貝弘氏は銀・銅・黒味銅の三種を素材とするので「もくめがね」の「がね」に「銅」の字を当てている。「杵目銅」は白・赤・黒の三色が層になって彩りを添える。

私は一二年前に「杵目銅の指輪を作ろう」という企画に参加して千貝氏と出会った。午前中だけという気軽さと、家事に疲れた指に少しだけありきたりではない彩りが欲しかったからだ。

作業台に並んだ道具を使って金属を削ったり曲げたりするのは楽しかった。しかし、金属の

端と端を結合させて丸い指輪の原型を作る溶接はガスバーナーの火力におろおろするありさまだった。杵目銅のこともよく知らずに臨んだ講習ではあったが、硬い金属片がどんだん形を変えていく工程に魅了され、削ることによって現れる斑紋や磨くほどに輝きを増す金属に心がときめいた。

完成した指輪は模様が少し捻じれてしまったが満足だった。一味違うところがとても気に入った。そして、もつとやってみたいという気持ちがふつふつと湧き上がっていた。

それからほどなく、私は千貝工房の門をたたいた。千貝氏は秘伝の技法を甦らせたお一人で、卓越した技術の持ち主として「現代の名工」と称される鍛金作家だ。杵目銅の地金じがねを正確な寸法で削り、幾何学的な模様を出す手法に特徴がある。

工房には切断機や歯車の付いたローラー・研磨機・特殊なガスボンベが並び、さながら工場のようなだった。床には穴の開いた大きな切り株が置かれ、棚には茶色の瓶に入った薬品の数々、壁には金槌や糸鋸が整然と並んでいた。何に使うのかもわからない道具もたくさんあって、鍛金にはこれだけの道具と場所が必要なことを知った。

最初の一年は指輪やペンダント、ブローチなどアクセサリーのヤスリ掛けを教わった。二年目は銅でタンブラーを作りながら鍛金の基礎を懇切丁寧にも何度も何度も繰り返し見てもらっ

た。三年目に師匠の杓目銅作りを見学させてもらい、四年目でようやく憧れて止まない杓目銅の制作に携わることができた。

三種類の板金は同寸法で正確に切りそろえ、表面の傷や油脂を取り除くために一枚一枚、表も裏も丁寧に磨く。銅と黒味銅の間に銀を挟んで交互に重ね、鋼鉄の型に収めていく。大きさと厚み、枚数はその時々で変わっていくが、この度は厚さを一ミリにして一九枚用意した。

焔の饗宴から生まれた地金は型枠を外して三〇トンの圧力を徐々に掛けながら均一に延ばしていく。一九ミリの厚さが五ミリになり、面積は約五倍に広がった。

圧延の途中でミシミシとかキュツという微かな音を感じる時がある。それは層の内部に異常が起きた予兆だ。嫌な予感剥離剥離といって、何らかの原因で融着できなかった部分があることを教えている。そのまま圧力を掛け続けると傷口が広がって成形することができなくなる。こんな失敗が稀に起こる。一年に一度、その音を聴いたときは心底がっかりしてしまう。板金を揃えるにはそれなりの資金も必要で、決して無駄にはできない素材だった。

何度で何分加熱すれば剥離のない杓目銅ができるという方程式はない。その日の気温や湿度、金属の品質によっても炉から出すタイミングは異なる。表面に孔をあけて渦巻き模様の大ささや数を調整するが、なかなか計算どおりにはいかない。反面、偶然が思わぬ好条件を生む

こともある。杵目銅には予測のつかない難しさがあつた。

失敗から学ぶことは大きいが、悔しさを喜びに変えることはもっと難しい。師匠は「これでもいいと思つたことは一度もない」と常々口にしていた。

杵目銅ができてそれもそれは制作工程の半分ではない。後の半分は鍛金技術の絞り技法しぼりに委ねられる。絞りとは金槌や木槌を使って丸く延ばした円の中心から外側の面積を畳み寄せるように叩いていくことだ。金属は槌打ちすると硬化するが加熱すると柔軟になる。この性質を利用して、熱して柔らかくして叩く作業をひたすら繰り返して曲線の立体を作っていく。

叩くときは右手に金槌を握り、左手で板金を支える。その内側にまわる四本の指を広げたり伸ばしたりして、曲線の角度や槌目の間隔を調整する。一定の角度、一定の間隔、一定のリズムが大切で、安定した姿勢が作品の出来を左右する。

初めは手にも肩にも腕にも力が入って、叩くごとに形が歪になつていった。師の手を借りて直してもらつてもまた壊してしまい、思うようにならないもどかしさに諦めかけたこともあつた。しかし、少しずつ形になっていく嬉しさは捨てきれず、金属の性質に奥深さを感じるようになっていった。重ねて、鍛金の心得もないはずの素人を快く受け入れてくださる師のおおらかな人柄にもどんどん惹かれていった。ご自分の道具を「これ使え」と言つて差し出す度量の

大きさに信頼と敬愛の念を抱いた。「できたな」と言われると、鯉節をもらった猫のように嬉しかった。

どうにか形になった最初の作品「鍛銅<sup>たんどう</sup>花器<sup>かき</sup>・木立<sup>こだち</sup>」は秋田県美術展覧会（県展）に応募して入選となった。縦に槌目を揃えて樹木になぞらえたが不揃いな槌跡に当時の自分が目に浮かぶ。この時の驚きと嬉しさは忘れられないが、手にマメができ火傷も繰り返した記憶は消えてしまった。

以来、勉強の機会として公募展の出品が目標となった。展覧会は仕上げた安堵とこれでいいのかという不安が交雑する場所だ。次の課題も見いだせる鍛錬の場だった。

工房に通って一〇年余り。「やりたかったらやってごらん」という居心地の良さに守られてきた。杳目銅という稀な素材を惜しげもなく公開し、誰でも製作できるように配慮がなされているのは杳目銅という技法を廃れさせたくないという師匠の確固たる信念があるからに他ならない。

大量生産品に押されて手作りのものは私たちの暮しから遠ざかってしまっただけで、それでも日々の暮らしの中で、使い勝手がよく生活に彩りを添える美しいものとして杳目銅はあってほしいと願っている。

技術の習得に近道はなく、終点も見えない。できなかつたことができるようになる喜びを求めて、私はこの道を歩んでいきたい。

工房にいと誰かが叩く大きな音や低く擦れるヤスリの音が共鳴して耳に響く。その中で自分の握った金槌と板金が垂直に当たって硬く澄んだ音がした時、私には心地よい合奏に聞こえる。

方程式のない斑紋

エッセイ・紀行文の部 ふるさと秋田文学賞佳作 受賞者のことば

甦った杵目

石山 敦子

秋田県の伝統工芸のひとつに「杵目銅」という金属工芸があります。十数年前になります  
が、指輪の体験講習が忘れられず、この道に入りました。

金属工芸は鍍金・彫金・鍛金という分野がありますが、杵  
目銅は叩いて作る鍛金技法のひとつです。異なる金属を何枚  
も重ねて、その層が木の年輪に見えることから杵目と呼ばれ  
ています。秋田藩の三代藩主・佐竹義處に鋳師として召し抱  
えられた正阿弥伝兵衛が独自の技術を刀装具に施した技法で  
した。「金銀銅杵目銅」と銘打った小柄が一点、県指定有形  
文化財として残っています。



小柄は刀の鞘に添える小刀のことで、鞘の内側に装着されます。見えないと粹いきを求めたのでしょうか。実用よりも裝飾に力を入れていた時代が偲おもげられます。個人所有のため写真を観察することしかできませんが、金属とは思えない質感と雲のような、年輪にも似た複雑な模様が心をとらえます。

廃刀令以降、その技術は永い間途絶えたままでしたが、昭和になって秋田市在住の金工家が試行錯誤のうえ現代に甦よみがえしました。刀装具から花器や酒器、そしてアクセサリーと形を変えながら生活に即した実用品として伝兵衛の杓目しやくめは継承されています。

なかなか思いどおりにならない作業の連続ですが、冷たくて硬い金属の板から立体を作る鍛金は私の人生に彩りを与えてくれました。そして秋田で生まれた杓目銅をもっと知ってもらいたいと思い、その気持ちきもちを文章に綴りました。

この度の受賞では厳しくもありがたいご意見をたくさんいただきました。ここまでたどり着いたゆえのご指摘と深くしつかり胸に刻み、今後こゝろに生かして参りたいと存じます。



選  
評



©三宅史郎

## 取材が作品の厚みになる

内館 牧子

選考はエッセイの部から始められたが、選考委員はかなり困った。どうも例年よりもレベルが低い気がしたのである。各委員は何度も読み込んでから集まり、選考の席でも細かく意見を交わした。

だが結局、最優秀にあたる「文学賞」は、今年は出せないと一致せざるを得なかった。

まず、「佳作」だが「方程式のない斑紋」は、選外の三点と比べたうえで、いわば相対的な佳作といえる。この難しい柰目銅を10年間やってきた作者。その心理描写があまりにありきたりすぎる。例えば「おろおろする」「ときめく」「ふつつつと湧き上がる」等々の常套句で処理することは、当然ながら避けた方がいい。むしろ、偉大な師匠へのオマージュに絞って書くによかったのではないか。

「小説の部」では、珍しいことに20代の若い二名が佳作に入った。本来、佳作は一名と決まっているのだが、二人には将来が楽しみであり、書き続けてほしいという思いで甲乙つけ難く、二名という事で主催者を押し切った。

その一篇の「浮遊する水」は、多少類型的なセリフがあったり、人物設定であったりはそのが、3・11の人間像がよく書けている。東日本大震災当日は、作者の山本郁人さんは11才か12才だっただろう。だが、人間を差別する状況、心理を細やかに描いている。

もう一人の山本愛海さんは、同性を愛する女性の心理と日常を、声高に叫ぶことなく静かに書いている。大きな欠点は「千束立つ」に触れていないこと。タイトルにまでしているのだ。最後の最後に参考文献の「錦木塚の考察(上)」から得ていることがやっと推測できる。

そしてラストで心理をまとめている。作者本人はおそらく、敢えて触れない方法を選ったのだろう。だが、これについて前もってオープンにし、知らしめておく効果も考える必要があった。この山本さんは、すでに小説なりエッセイなりを書いている人ではないか。

そして応募作65編のトップ立ったのは、青山トゴさんの「クリームシチュー」である。青山さんは常連の応募者で、かつてはエッセイでトップを取り、小説でもあと一步の佳作を取っ

だが、昨年はあえなく最終選考まで残らずに撃沈。そこで諦めずによく書き続けた。この姿勢を、佳作の若い二人にもぜひ伝えたい。

今回の青山さんの作品は、物語を書こうという意識が感じられ、映像が浮かぶ。委員たちは「うまくなった」と口をそろえた。

だが、決定的な失敗がある。これも委員たちは口をそろえた。いい物語をずっと書いて来て、ラストでこれは記者が会議中に居眠りをして見た夢だったとしているのである。

このラストにより、これまで書いて来た虚構が、一気に安っぽくなった。「八十日間世界一周」と自分自身を重ねる意図からも、ラストは現実の自分に戻したのだろう。だが、この蛇足がぶち壊してくれた。また、「現実生活で人参やソーセイジを見ると、夢の中のクリームシチューと重なる」との思いは、こじつけを感じて苦笑せざるを得ない。

蛇足さえなければ文句なしかったのだが、しかしそれでも、65作品のトップに立つ力を感じさせられた。

エッセイでも小説でも、最終選考に残りながら、惜しくも受賞ならなかった方々、もちろん全員ではないが、傾向として取材が足りないと思う。ネット検索や少ない資料、観光案内、ま

た思い込みで書いてしまう。それは物を書くことへの冒瀆と思われても致し方ない。

映画やテレビドラマの制作では、監督、シナリオライター、ディレクター、プロデューサー、デザイナーは必ず現地で取材し、歩き回る。現地の匂いを自分の体に入れるためだ。これが作品の厚みになる。ぜひ、次回の作品に生かして頂きたい。

〈脚本家 秋田市出身〉



## 文を飾り立てないこと 丁寧な観察を

塩野 米松

9 回目です。初めて、エッセイ・紀行文部門で、ふるさと秋田文学賞の該当がありませんでした。最終選考の選者は3人。それぞれが作品に、1から5までの評価を付けます。5は文学賞にふさわしいものに。3は佳作に値する人に。4は3以上5未満。2以下は賞を得る対象にならない。今回は西木先生が体調不良で欠席したので、内館先生と私の二人。それぞれが結果を数値で出し合いました。結果はエッセイ・紀行文部門には二人とも4以上がありませんでした。3という評価を繰り上げて、文学賞にするか、議論したのですが、今の作品ではまだ力が足りないという判断しました。故に文学賞がなしという結果になりました。残念です。

今回の作品で気づいたこと。

エッセイですから、書き手の体験やできごとへの心の動き、自分が思うことが書かれています。ですが、師匠や有名作家にまつわる出来事やある種の発見などを扱ったものが3作品ありま

した。人物を扱う場合、健在の方であれば、配慮や忖度が入りがちです。作者はその人物とこの後も接するでしょうし、その作品をその方が読むだろう事を前提に書くからです。亡くなった方達のことを書かれてある場合、私たちは書かれていることの事実確認や出来事の記載の正確さを確認します。生年、死亡年、記載された事象の事なども調べます。誤った記載に賞をあげるわけにはいかないからです。読み手にこう思われたいという意図が見え隠れすると、違和感として出てきて、作品の良さを壊してしまうものです。

10枚という制限枚数は紀行文には適していると思えますが、エッセイには多すぎるほどの枚数です。いいエッセイは、短い文章でみごとに心の動きや情景を描き出します。説明や引用、経過の報告などを入れすぎると冗漫になり、作品の切れ味が悪くなるのです。一枝の切り口を見て、剣豪が使い手に腕を知ると言いますが、エッセイでは切り口や温かさが大事な要素です。形容詞を積み重ねた文は流れを濁してしまいます。

書く喜びを知って、お書きになっっているのだから、あと一努力を。そのためには不要な部分を削ること。一度書き上げた文章を裸にしてみる事です。書き過ぎよりは、足りないかもというぐらいの方が効果は大きいものです。余白は余韻を残し、作品の奥行きを作ります。

佳作の「方程式のない斑紋」は、興味のあることを見つけた著者がその喜びや驚きをエッセイに仕上げたものです。杳目銅のみごとさ、高温の中で変化する金属の不思議を読み手に伝え

たいという気持ちはわかりませんが、驚き、不思議を言い過ぎても伝わらないもの。例えば最初の20行を取ってしまうとか、飾りを取り去った文章に戻してみると、私たちの言うことがわかるのでは。前作より格段の進歩でした。それも含めて佳作に推しました。

#### 小説の部。

エッセイ・紀行文の部門も、小説の部門も格段に質が上がってきていると思いますが、台地状でピークの図抜けた作品がないのです。選考委員会で点数を出し合っても、4はあるのですが、5がない。

それでも1位は、選考委員の意見は、いつも、ほぼ一致します。期待していることが同じだからです。「クリームシチュー」は、私も内館先生も評点が4で、トップでした。以下に僅差の人がいないので、文学賞は決定です。青山トーゴさんは、受賞歴のある常連さんです。今回の応募作の中でも安心して読める小説でした。そこまでの力がある方なので、あえて注文を言いますと、最後の21行はなくてもいいのでは。フィクションとして完結してたのにもったいないと思いました。それと田舎の方言の世界で育っている少年の一人称をぼくでいくべきか？ 登壇者達の年齢や時代がはつきりしないことも気になりました。

最終に残った奥さん、谷門さん、右川さんは、資料を調べ、設定を工夫し、物語に仕立て上

げ、みごとだと思えます。点数が競り合いになりますと、私たちは「筋立てが都合よすぎないか」「設定に無理がないか」と減点していきます。些細なことですが、秋田新幹線で、舞台の場所に行くにはどうやったら行けるか、自由席はないとか。秋田県の読者が読めば疑問に思われるだろう箇所があると点数を引きます。観光案内や想像を元に舞台を設定していると、どうしても無理が出てきます。取材は欠かせない大事です。現地に立てば、描写に幅が出てきます、書く喜びも増えます。

エッセイの部門でもそうでしたが、前置きを取ってしまえば、一気に物語が始まるのと思う作品が多いです。多分、文学とは「こういう描き方が大事なのでは」と誤解しているのではないのでしょうか。いい作品、好きな作品をたくさん読んで学ばれるといいですね。

佳作に選ばれた山本郁人さん、山本愛海さんの2作品は、描き方、設定に特異なものがありました。私はこの作者達に「物語作家としての芽」を感じました。愛海さんの題材に盛り込んだ錦木伝説などは使いようによっては奥深い作品に上がるのでは。少々読み手に努力を強いるところがありますが、期待を込めて、例外的に2作を佳作にあげました。

〈作家 仙北市（旧角館町）出身〉

一次選考委員 寄稿

楽しく読み、書く

柴山芳隆

「エッセイ」を日本語にする場合は「随筆」が一番多いかと思うが、すぐれた業績を残した国文学者の吉田精一は、わが国で「随筆」と名のつく書物が初めて出たのは室町時代だと指摘している。「東斎随筆」というのがそれらしいが、これは事実談や伝説を集めたもので、われわれが今日イメージしている随筆とはずいぶんかけ離れた作物さくぶつだそうである。

「随筆」という単語の出現は室町時代だが、随筆作品はその前の平安時代からすでに存在していた。改めて言うまでもなく清少納言の『枕草子』がその代表である。その後、中世に入る  
と鴨長明の『方丈記』、吉田兼好の『徒然草』と続き、その流れは近世江戸期の松平定信『花  
月草紙』、新井白石『折りたく柴の記』などに受け継がれた。明治以降の近代になってから

も、福沢諭吉、斎藤緑雨、正岡子規、夏目漱石、寺田寅彦、森田たま、幸田文、阿部次郎、中谷宇吉郎、向田邦子、中井久夫、丸山健二等々、随筆の専門家を含めた作家、学者、文化人がさまざまな分野の題材を縦横に書き継いで今日に至っている。

日本は温帯に位置して気候はおおむね温暖であり、四つの季節がなめらかに移り変わっている。その移ろいに合わせて空や雲がさまざまな表情を見せ、花木が野山を彩って小鳥たちがさえずる。四囲が海に囲まれた島国なので海外から過酷な侵略を受けたこともほとんどないし、民族の構成も比較的単純である。日本という国のそうした環境が温和で穏やかな日本人の心性を育み、それが、随筆という、あまり肩肘を張らずに書いたり読んだりすることのできる表現形式につながっているような気がしてならない。日本語で「随筆」と括られる「エッセイ」は、日本人に適した文芸様式なのであろう。

ひるがえって、エッセイとは何かということになると、モンテーニュの『エッセイ』の序文が有名だが、多少分かり難い部分なきにしもあらずなので、ここでは、英文学者で評論家でもあった厨川白村の同趣旨の一文を白村の『象牙の塔』から引用してみたい。

エッセイにとって何よりも大切な要件は筆者が自分の個人的人格的色彩を濃厚に出すことである。その本質から云って、記述でもなければ説明でもなく議論でもない。報道を主眼とする新聞記者が非人間的インパーソナルに、記者その人の個人的主観的の調子を避けるのとはちやうど正反対に、エッセイは極端に作者の自我を拡大し誇張して書かれたもので、その興味は全くパーソナル・ノオトにある。或学者は、だからこの全体を評して詩歌に於ける抒情詩を散文的に行つたものだとも云つた。筆者その人のおもかげが浮き出して居なくては面白くない。

枝葉はいろいろあるにしても、エッセイの根幹はここだと解釈してよいであろう。ただ、自分が浮き出てくると言つてもそれは自身の具体的な体験とか現実生活に限られるものではない。間接的な経験や読書等から得たものについても広くかつ深く考えたところを加味していくことが望まれる。

要するに、エッセイは作者の個性や資質、さらには学識・人格なども切り離せないものであつて、作者の人間性は最終的には隠そうとしても隠し切れるものではない。術学的な人の文章はどこかに術いがほの見えるし、品位の高い文章は品性豊かな人にしか書けないということ

になるから怖い。小説では作者はフィクションという幕の陰に自分の本性を押し隠すことができるが、エッセイではそうした手段は使えないし、その必要もない。

エッセイをものしたいと志す人は既述のような事情を理解して原稿用紙に向かい、それを読みたい人もまたエッセイの特色を諒としたうえで作品を手に取りれば、エッセイをより深くまた楽しく読めるのではなからうか。読み書きは、最終的には楽しさにつながることでホンモノになるのだと思っている次第である。

〈作家 秋田市在住〉



秋田県の読書活動推進施策

## ～県民運動の視点で読書活動を推進～

秋田県では、全国に先駆けて読書条例〔秋田県民の読書活動の推進に関する条例（平成22年4月1日施行）〕を制定し、また毎年11月1日を「県民読書の日」と定めています。

「第3次秋田県読書活動推進基本計画」（令和3年度から7年度まで）に基づき、「生涯にわたって読書に親しみ、心豊かに」という基本目標のもと、県民がライフステージに応じて読書に親しむ活動を推進しています。



©2015 秋田県んだッチ

### 《読書活動推進体制》

#### ●秋田県読書活動推進基本計画の進行管理

秋田県読書活動推進本部《知事を本部長とし、各部局長で構成》

#### ●施策の一体的推進

秋田県読書活動推進連絡会  
《庁内関係12課所で構成》

総合政策課 次世代・女性活躍支援課  
長寿社会課 障害福祉課  
教育庁総務課 幼保推進課 義務教育課  
高校教育課 特別支援教育課  
生涯学習課 県立図書館  
生涯学習センター

#### ●市町村との協働による推進

秋田県読書活動推進連絡協議会  
《県と25市町村で構成》

市町村企画担当課  
市町村教育委員会読書活動推進担当課  
  
県総合政策課  
教育庁総務課 生涯学習課

## ≪令和4年度 県の読書活動推進の取組例≫

### ○読書啓発イベントの開催

11月1日「県民読書の日」にちなんだイベントとして、10月16日（日）秋田拠点センターALVE（秋田市）において、「又吉さんと楽しく読書トークライブ」を開催し、約250名が参加しました。

第1部「第9回ふるさと秋田文学賞」表彰式では、受賞者4名の表彰のあと、選考委員の内館牧子さん（ビデオ出演）、塩野米松さんの講評をお聞きいただきました。

第2部「又吉さんと楽しく読書トークライブ」では、お笑い芸人で芥川賞作家の又吉直樹さんが、「本が好きになってから退屈やとか暇やなあって時間がなくなりました。」「共感と発見が両方あるのも本の魅力。読むことで頭の整理もできる。」など、読書の楽しさや本の読み方について熱い思いを語りました。

参加者からは、

- ・選考委員の方々の講評はとても参考になりました。今まで知らなかった世界をちょっと覗いた感じがしてうれしいです。
- ・僕と同じくらいの年の人が小説を書いていることを知ると、読むだけでなく書きたいという風にも思いました。
- ・又吉さんのライブは、ユーモアを交えて流れる河のようなトークで面白かったです。

等の感想が寄せられました。



## ○読んだッチ・リレー文庫

子どもたちの読書環境を充実させるため、家庭で読み終わった絵本や児童書を県民の皆様から寄贈していただき、希望する保育所等に贈って子どもたちに読書の楽しさをリレーする取組です。

平成23年度から令和3年度までの11年間で1,149名の方々から寄贈があり、894か所の施設に届けられ、子どもたちに楽しんでもらっています。

保育所、幼稚園、放課後児童クラブ、公民館、体育館、病院、店舗等、子どもたちが集まる県内の施設ならどこでも設置できます。

随時受付していますので、ぜひご利用ください。



読んだッチ・リレー文庫（例）

## ○「あきたブックネット」による情報発信



特設ページ「あきたブックネット」

県公式ウェブサイト「美の国あきたネット」内の特設ページ「あきたブックネット」で著名人がおすすめする本の紹介やこれまでの県の取組など、読書が身近になる情報を発信しています。

また、Twitterアカウント「あきたブックネット」では、読書に関して特長ある活動をしている人物や巷で話題の本など、県内外の読書や秋田に関する新しい情報を随時提供していますので、ご覧ください。

## ○読書活動ステップアップ事業

若者を中心とした県民の読書意欲を喚起するため、特長のある取組をしている図書館や書店、ブックカフェの経営者等を取材しTwitterやウェブサイトで発信したり、本文学賞の受賞作品を映像化した読書啓発動画等を制作し、動画投稿サイトYouTubeで配信しています。



Twitter「あきたブックネット」

～読書に関する情報を発信しています～

○「あきたブックネット」(「美の国あきたネット」内)

<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/31730>





作品募集要項・実施状況



# 第9回ふるさと秋田文学賞 作品募集要項

## ●募集作品

- テーマ 秋田県を舞台とした、あるいは秋田県内の自然・文化・風土・人物・物産などを題材とした小説、エッセイ、紀行文
- 部門 「小説の部」 ……A4判の400字詰め原稿用紙50枚以内  
「エッセイ・紀行文の部」 ……A4判の400字詰め原稿用紙10枚以内

## ●応募資格

年齢・職業・国籍を問わず、どなたでも応募できます。

## ●作品募集期間

令和4年4月1日(金)から令和4年8月1日(月)まで  
※郵送(当日消印有効)または持参(平日午前9時～午後5時)してください。

## ●賞

「小説の部」	ふるさと秋田文学賞 ……1編(正賞/賞状 副賞/賞金50万円)
	ふるさと秋田文学賞(佳作)……1編(正賞/賞状 副賞/賞金5万円)
「エッセイ・紀行文の部」	ふるさと秋田文学賞 ……1編(正賞/賞状 副賞/賞金20万円)
	ふるさと秋田文学賞(佳作)……1編(正賞/賞状 副賞/賞金2万円)

※入賞者には、後日、受賞作品集を贈呈します。

**ご注意**  
送付部数は  
**4部**(コピー可)

## ●選考委員

1次選考委員 柴山 芳隆 氏 (作家 秋田市在住)

最終選考委員 内館 牧子 氏 (脚本家 秋田市出身)  
塩野 米松 氏 (作家 仙北市:旧角館町出身)  
西木 正明 氏 (作家 仙北市:旧西木村出身) (五十音順)

## ●応募規定

- 原稿 ・原稿は縦書きとし、電子データでの応募は不可とします。(ワープロ原稿は横長A4判の白紙に30字×40行の縦書きで印字し、400字詰め原稿用紙換算枚数を明記)
- ・日本語で書かれた自作未発表のものとする。
- 表紙 ・応募作品には次の事項を明記した表紙をつけてください。  
①応募部門、②題名(ふりがな)、③原稿用紙換算枚数、④氏名(ふりがな)、ペンネーム(使用する場合のみ)、⑤郵便番号、⑥住所、⑦電話番号、⑧年齢、⑨性別、⑩職業(学生の場合は学校名)、⑪引用または参考とした資料・文献、⑫募集を知ったきっかけ(過去に応募、リーフレット、公募ガイド、新聞、ウェブサイト名等)
- あらすじ ・「小説の部」については、200字程度にまとめた「あらすじ」を表紙の次のページに添付してください。
- 応募部数 ・作品は4部お送りください。(コピー原稿可。必ず通しページ番号をつけ、表紙、あらすじを書いた紙を添付の上、右肩をクリップ等で綴じること)。
- その他 ・表紙、ワープロ原稿の様式は、ウェブサイト「美の国あきたネット」でダウンロードすることができます。  
・〈表紙〉に記入された個人情報、本文学賞に関するもの以外には使用しません。  
・応募作品は一切返却しませんので、あらかじめご了承ください。  
・各部門一人1編に限り、同一部門への二重投稿は失格となります。  
・入賞作品の著作権は主催者に帰属します。(ただし、主催者は著作者本人の意向を尊重し、作品を広められるよう配慮するものとします。)

## ●選考結果の発表

- ・令和4年10月中旬、入賞者に直接通知するとともに、ウェブサイトに掲載します。  
・表彰式は、令和4年10月下旬～11月上旬に開催予定の読書活動啓発イベント(秋田市で開催)で行います。

## ●応募・問合せ先

秋田県企画振興部 総合政策課 県民読書推進班  
〒010-8570 秋田県秋田市山王四丁目1番1号  
電話 018-860-1216 <平日:午前9時～午後5時>

## 第9回ふるさと秋田文学賞の実施状況

### 1 応募状況等

・応募総数142

[内訳] 小説の部65、エッセイ・紀行文の部77  
(県内43、県外99)

### 2 最終選考候補作品(敬称略)※応募順

#### ○小説の部(6作品)

「滝の音」奥 祐治(福井県大飯郡)  
「クリームシチュー」青山 トーゴ(東京都台東区)  
「浮遊する水」山本 郁人(埼玉県北葛飾郡)  
「ババヘラ・アイスで乾杯!」右川 雅基(香川県高松市)  
「出口に向かっている」谷門 展法(千葉県柏市)  
「千束立つ日陰の月花」山本 愛海(静岡県湖西市)

#### ○エッセイ・紀行文の部(4作品)

「あどけない話」近藤 彩(秋田市)  
「再見、あきた十文字映画祭」村本 大志(東京都世田谷区)  
「方程式のない斑紋」石山 敦子(秋田市)  
「記事の囁き譜面の眼差し」山口 誠志(神奈川県横浜市)

### 3 入賞作品(敬称略)

#### ○小説の部

<ふるさと秋田文学賞>

「クリームシチュー」青山 トーゴ(東京都台東区)

<ふるさと秋田文学賞 佳作>

「浮遊する水」山本 郁人(埼玉県北葛飾郡)  
「千束立つ日陰の月花」山本 愛海(静岡県湖西市)

#### ○エッセイ・紀行文の部

<ふるさと秋田文学賞>

該当作なし

<ふるさと秋田文学賞 佳作>

「方程式のない斑紋」石山 敦子(秋田市)

## 第9回ふるさと秋田文学賞応募者内訳一覧

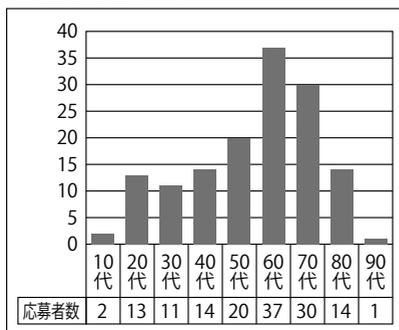
部門別応募数(編)

小説	65
エッセイ・紀行文	77
計	142

男女別応募者数(人)

男	80
女	62
計	142

年代別応募者数(人)



都道府県別応募者数(人)

県	内	43
県	外	99
都道府県別	北海道	4
	青森県	1
	岩手県	5
	宮城県	3
	山形県	1
	福島県	0
	茨城県	4
	栃木県	1
	群馬県	0
	埼玉県	5
	千葉県	6
	東京都	24
	神奈川県	14
	新潟県	2
	富山県	0
	石川県	0
	福井県	1
	山梨県	1
	長野県	0
	岐阜県	3
	静岡県	1
	愛知県	2
	三重県	0
	滋賀県	1
	京都府	0
	大阪府	5
	兵庫県	7
	奈良県	0
	和歌山県	0
	鳥取県	0
	島根県	0
	岡山県	0
	広島県	1
	山口県	0
	徳島県	1
	香川県	1
	愛媛県	1
	高知県	0
	福岡県	2
	佐賀県	1
	長崎県	0
	熊本県	1
	大分県	0
宮崎県	0	
鹿児島県	0	
沖縄県	0	
計	142	



第9回ふるさと秋田文学賞受賞作品集

発行日 令和五年二月一日

発行 秋田県

編集 秋田県企画振興部総合政策課

秋  
田  
県

